



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学文学研究院紀要, 第176号, 全1冊
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 176
Issue Date	2025-07-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95785
Type	journal
File Information	00_176_all.pdf



北海道大学

文学研究院紀要

第 176 号

北海道大学文学研究院

2025

北海道大学

文学研究院紀要

第176号

北海道大学文学研究院

2025

目次

大阪大学外国図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊) 翻刻・その1

..... 小林 理 正・新 開 なつみ

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

——『權』・『春燈』・『岩伍覚え書』・『寒椿』を中心に..... 水 溜 真由美

大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊)
翻刻・その1

小林 正・新 開 なつみ

一

平安時代後期成立と目される作り物語の一つに『とりかへばや』がある。現存本は、いずれも享受者らの手で改作されたもので、原作本は伝わらない。当初の物語と、現存本の物語との違いは『無名草子』や『風葉和歌集』から読み取ることができる。

現存『とりかへばや』の伝本は、その数が一〇〇を越えるとされる⁽¹⁾。書き写された数が多いが、版本は印行されていない。この物語の諸本群は通常本系統(第一種〜第四種)と異本系統(第一種〜第二種)の二系統六種および混合本に分けられ、⁽²⁾伝本それぞれの位置づけが検討されている。その中でも異本系統とされる伝本は、残存数の僅かなこ

とが知られている。第一種本には天理大学附属天理図書館本 [913.39—Y 15—1 (～5)] および筑波大学附属図書館本 [Y 120—238] が、第二種本には静嘉堂文庫本 (イ本注記) [514 函4 架21253] が挙げられる程度であった。しかしながら近時、早稲田大学九曜文庫蔵本 [文冊 30 C0082] (以下、早稲田本) が第二種本にあたる旨、千葉直人^③が指摘し、異本系統本あるいはこれとの関係が疑われる伝本が新たに見出された。また、国文学研究資料館長谷章久旧蔵本 [93-80-1 (～5)] (以下、国文研長谷本) は異本系統本との近さが窺われるが、第一種本および第二種本とも異なる事例を有している。^④現状、異本系統の伝本と推定されるが、その正確な位置づけは未詳なままとなっている。通常本系統の伝本に比べ、異本系統の伝本の研究は残存数が少ないことに加え、その本文を簡便に確認し得ないという状況であるがゆえ充分になされたとは言えない。

二

こうした異本系統の伝本群と関係すると思われるのが、このたび紹介する大阪大学外国学図書館蔵本 (以下、阪大本) である。以下、当該本の略書誌を示す。

【請求記号】J340.123.11 (～5)

【冊数】五冊

【装訂】袋綴 (表紙・紺地に己繋ぎ)

【料紙】楮紙

【法量】〔第一冊〕縦二六・九糎、横一八・四糎 〔第二冊〕縦二六・九糎、横一八・四糎

〔第三冊〕縦二六・六糎、横一八・三糎 〔第四冊〕縦二六・六糎、横一八・三糎

〔第五冊〕縦二六・七糎、横一八・二糎

【外題】「とりかへはやの物語 一（五）の巻」（表紙左肩題簽）

【内題】外題ト同ジ（扉）

【丁数】〔第一冊〕墨付丁数六一丁ウ 〔第二冊〕墨付丁数三三丁ウ 〔第三冊〕墨付丁数五八丁ウ

〔第四冊〕墨付丁数四二丁ウ 〔第五冊〕墨付丁数三〇丁ウ

【一面行数】一一行

【一行字数】二四字前後

【字高】〔散文〕二〇・五糎前後 〔和歌〕一九・五糎前後

【和歌書式】一行書き（行頭一字下げ）

【識語・奥書】ナシ

【蔵書印】「第五臨時教員養成所圖書之印」（前見返し） 「第五臨時教員養成所圖書」（墨付丁数一丁オ）

「大阪外國語學校圖書印」（墨付丁数一丁オ） 「大阪外語圖書」（墨付丁数一七丁オ）

〔※第二冊のみ墨付丁数一八丁オ〕

【その他】〔第五冊〕後見返し「とりかへはやの物語^{大尾}」トノ尾題アリ

法量と字高・一面行数の一致に加え、その手跡から判断するに全五冊、一揃いの伝本であると考えられる。以下、

阪大本の本文を具体的に確認していく。なお判読の便を図るため、私に清濁の区別、鍵括弧を施すなどして本文を掲げたが、そのほかは原本の表記を尊重した(特記しないかぎり、以下同様)。

○ 阪大本・第一冊・三六丁ウ〜三七丁オ

かゝるたがひめはいできぬるぞなどいと思ひとぢめつる

心地して経をつくぐとよみ居給へる何となくもの思は」三六丁ウ

しき御心のすむにまかせて「弘誓深如ぐぜいしんによかい」とうち

あげていみじうたふとくよみ給ふなるをきゝふし給へる

女中納言は心に任せ、「弘誓深如ぐぜいしんによかい」と『法華経』の一節を口にする。女中納言が口にした経文をめぐつて諸本、異同が確認される。たとえば『新編日本古典文学全集』(小学館)の底本・国文学研究資料館蔵初雁文庫本(以下、初雁文庫本)の本文は、次のようにある。

○ 国文学研究資料館蔵初雁文庫本・巻一・三九丁オ⁽⁵⁾

めつる心地して経をつくぐとよみる給へるなにと

なくものおもはしき御心のすむにまかせて「四字分空白」

「一字分空白」とうちあげていみじうたふとくよみたまふな

るをきゝふし給へる女君の御心ちたへがたうかなしく

初雁文庫本の本文、その一部を行取り・字配りはそのままだに掲げた。「御心のすむにまかせて」うちあげられた一句、これにあたる本文が同本にはなく、代わりに同じ行末四字分相当の空白と、行を変え、一字分相当の空白が置かれて

いる。「ぐぜいしん弘誓深如海によかい」を有している伝本は、たとえば鈴木弘道『とりかへばや物語 本文と校異』（大学堂書店、昭和五三年）収録本の中にはない（一三四頁）。この本文状況は既存の本文資料が異本系統の伝本を収めていないこととも関係している。異本系統本を確認すると、第一種とされる伝本・二つと、国文研長谷本が、「ぐぜいしんによかい」との一文を備える。それゆえ、阪大本と異本系統本（第一種）との近さが窺われる⁶。

錯簡ゆえに文意を充分に読み取ることのできない箇所が阪大本にはある。以下、初雁文庫本と阪大本の本文を対照して掲げ、その具体相を確認する。

○ 初雁文庫本・卷一・三三丁ウ～三四丁オ

「まことに御けしきなをれいならずげなり。たきのよどみはづかしげなるまでもやせ給にけるかな。御心ちのくるしきにはあらず。いかなる御心ちのみだれぞ」とうちほゝゑみていひあてたるに、おもてあかむ心ちすれど、これにぞうちわらはれて、「しほれすかたはいまのみや御らんずる」といたくみだれぬほどのけしきにて、かへりいで給。

○ 阪大本・第一冊・三四丁オ～三四丁ウ

「まことに御けしき猶例ならずげなり。瀧のよどみはづかしげなるまでもやせ給ひにけるかな。御こゝちのくるしきにはあらず。いかなる御心のみだれぞ」とうちほゝゑみていひあてたるに、おもてあかむこゝちすれど、これにぞうち★思ひよりにけると我ほめをしいひちらし給へるものと哀なり。

★部を境に両本の間で異なりが確認される。場面は四の君との密通後、恋煩う宰相中将を見舞う女中納言の姿を語る。その悩みの種を奇しくも言い当てられ、どきりとしたのか、宰相中将は顔が赤らむ思いがしたけれどこれを堪

え、女中納言のからかいに笑つて応える。これが初雁文庫本の叙述である。これに対し、阪大本では宰相中将は顔が赤らむ思いがしたけれど、「これにぞうち思ひよりにけると我ぼめを」する。文意が前後の叙述に馴染んでいない。解釈上の問題がここにはあると言わねばなるまい。これと同様な行文であるのは異本系統第一種の伝本と、第二種の伝本・早稲田本に加え、国文研長谷本がある。いずれも阪大本と同じく行文途中にこの解釈上の不審が見られる。ちなみに、「うち」以降の本文は四丁ほど離れた丁面途中にある。どうやらこの不審は目移りに起因するものではなく、親本あるいはそれ以前の段階で生じた綴じ誤りに因る瑕疵が継承されたものであるようだ。こうした損傷を異本系統の伝本群との間で阪大本は共有している。それだけに異本系統本、その再吟味におよぶさい、阪大本もまたその検討の組上にのぼせる必要がある。

ちなみに阪大本と国文研長谷本は、その行取り・字配りがきわめて高いレベルで一致することを確認している。

○ 阪大本・一五丁ウ

へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか
しる人あらんいと人目に見えていまめかしくまろはれ
給ふことはことになくたゝあてやかにめやすきほどの
御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき御あり
さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと
よりはと見ゆれと男君はまたいとわかくものし給へは
さこそはすくし給へとものつゝましくおほさるゝなめり

なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさま世に
たくひなしましたけさうかましくゆきたはふれにたる
けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど
よりはことなるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に

○ 国文研長谷本・一五丁ウ

へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか
しる人あらんいと人目に見えていまめかしくまろはれ
給ふ事はことになくたゝあてやかにめやすきほどの
御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき御あり
さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと
よりはと見ゆれと男君はまたいとわかくものし給へは
さこそはすくし給へともものつゝましくおほさるゝなめり
なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさまよに
たくひなしましたけさうかましくゆきたはふれにたる
けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど
よりはことなるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に

いま両本の本文を原本の表記を尊重して示した。傍線部のような仮名と漢字の表記差はたしかにある。しかしなが

ら、行取り・字配りの一致度、その高さもたしかである。これに加えてその筆跡も酷似し、行文途中の不審改行点も重なるところがある(阪大本・第一冊・八丁ウ、一二丁ウ、一二丁ウ／国文研長谷本・第一冊・八丁ウ、一二丁ウ、一二丁ウ)。ただし阪大本になく、国文研長谷本にはある行文途中の改行例も存在する(国文研長谷本・第一冊・一〇丁ウ)。阪大本の実相、その分析に国文研長谷本は重要な役割を果たすように思われるが、両者の違いにも留意が必要である。

異本系統本との重なりが指摘される、推定される伝本はその数が少ない。そのうえ、異本系統本の本文を簡便に確認できる資料はこれまでなかった。そのため異本系統の伝本、その検討・検証は紙焼き写真を入手している者か、原本調査を行った者らを除いて容易でなかった。こうした研究状況を承け、本稿では異本系統本との近さが窺われる阪大本の紹介とその本文の提供をつうじ、『とりかへばや』の本文資料の拡充を図る。なお、本稿を第一回とし、巻一以降については連載(全五回)予定である。

【注】

- (1) 西本寮子「写本で伝わる物語 後期物語と『とりかへばや』」(国文学研究資料館編『古典籍研究ガイドンス 王朝文学をよむために』笠間書院、平成二五年・第二版)。
- (2) 『とりかへばや』諸本分類については、いくつかの説がある。ここでは新居和美「『とりかへばや』諸本分類考——『改作本系統』の位置づけについて——」(『中古文学』七八号、平成一八年二月)にて示された、最も新しい諸本分類に従った。
- (3) 千葉直人「『とりかへばや』伝本系統試論——第四種本を中心として——」(『國學院雑誌』一二四卷九号、令和五年九月)。
- (4) 新居和美「『とりかへばや』異本系統派生の想定——長谷章久博士旧蔵本の紹介をかねて——」(『古代中世国文学』二四号、平成二

○年三月)。

(5) 本文は、国文学研究資料館「国書データベース」公開の原本画像に拠る (<https://doi.org/10.20730/200003519org/10.20730/200003519> 最終アクセス:2025年4月24日)。以下、国文学研究資料館に蔵せられている伝本は、いずれも同データベースに拠って確認した。

(6) ただし、異本系統第一種本と国文研長谷本が共有する独自異文「(いみしく心やましき)事とあはめ給へど何とこたへんかたもなく只涙にぞせきあへずさはいへ(女君の御袖くちすそのつままであてになまめかしく)」「(六〇丁ウ)を阪大本は有しない。第一種本との近さが疑われるも、それとの違いも存在していることから、ここでは阪大本の位置づけを安易に言明しない。

[附記1] 原本閲覧および翻刻掲載の、高配を賜った大阪大学附属図書館および大阪大学外国文学館に衷心より御礼申しあげる。

[附記2] 本稿は、JSPS 科研費 (24K22491) の助成を受けた研究成果の一部である。

凡例

○ 本稿は、大阪大学外国文学館蔵「とりかへはやの物語 一の巻」[340=123=1(～5)](以下、阪大本)を翻刻するものである。礎稿は小林が作成し、これの再検討を新開が行い、最終確認を両者で実施した。なお本稿の文責は、すべて小林が負うものである。

○ 便に供するため、『新編日本古典文学全集』の見出し番号を掲げ、そのブロック毎に本文を示した。なお見出し範囲の末尾に阪大本の丁数と、そのオモテとウラを明記した(例:○○丁オー××丁ウ/△△丁オ)。

○ 各見出し一文目と和歌は改行して掲げたが、そのほかは原本どおりの行取りでなく、追い込み書きで記した。ただし原本での行取りが分かるよう改行位置は「〳」で表示した。なお和歌・結句での改行はこれを記さなかった。

○ 当該本は清濁を区別した書写がなされている。しかしそれは厳密なものではない。そのため紹介に際し、いまこれを採らなかつた。

○ 親本またはそれ以前の段階で発生したと思しき錯簡のため叙述が前後する箇所がある。錯簡部の始めと終わりに破線・波線・二重傍線をそれぞれ付し、当該部の対応部がそれぞれどこ分かるように表示した。その叙述を本来の形へ戻しはしなかつたが、見出し番号については、これを正した。

○ 漢字は旧字体・異体字などの別は、これなるべく忠実に表示した。ただし、もとの字体が入力できない場合に、かぎり、これを通行の表記に改めた。

○ 損傷が明らかな本文であっても(ママ)などは付さず、これをそのまま表示した。

○ 「はい」や「こゝち」など、熟語の語義と仮名字母が一部一致するものは本行に平仮名を記し、字母をルビの括弧内に記し、これを表示した(例…「はい」^(本)、「こゝち」^(通)「すくせ」^(世)など)。なお、字母ルビは通行の表記で示した。

○ 合点の類は省略したが、傍書・傍注はこれを本文とともに掲げた。なお頭注は見出し番号ごとにまとめて示した。施注本文と注解を掲げ、これらを改行して書写する場合は、その改行点を「」で表示した。施注本文が明示されていない事例については、該当する本文を私に掲げ、「施注本文」―頭注」の形式で示した。

(例1…○かへすくとりかへばやと／此詞をもて物語の名とせり)

(例2…「しはやく」―引哥／○須磨の浦のしはやくけぶり風をいたみおもはぬ方にたな引にけり)

(例3…「まやのあまり」―○東屋のまやのあまりの雨そ、き我たちぬれぬその戸ひらかせ／此哥をうたひて也)

【翻刻】第一冊

とりかへはやの物語 一の巻（外題）（表紙）

とりかへはやの物語 一の巻（内題）（扉）

【一】

いつの比にか権大納言にて大将かけ給へる人御かたち／身のさえ心もちひよりはしめて人から世のおほえも／なへて
ならすものし給へはなに事かはあかぬ事／あるへき御身ならぬに人しれぬ御心のうちのもの／おもはしさそいとつき
せさりける
（1丁オ）

【二】

北の方ふた所ものし／給ふひとりは源宰相ときこえしか御むすめにものし／給ふ御心さしはいとしもすくれねと人よ
りさきに／見そめ給ひてしかはおろかならず思ひきこえ給ふに／いと、よになく玉ひかるをとこ君さへ生れ給ひにし
かは／またなくさりかたきものにおもひきこえ給へり今／ひと所は藤中納言ときこえしか御むすめにものし／給ふ此
御はらにも姫君のいとうつくしけなる生れ給ひ／しかはさま／めつらしく思ふさまにおほしかしつく／事かきりな
しうへたちの御有さまのいつれもいとしも／すくれ給はぬをおほすさまならす口をしき事に／おほしたりしかと今は
此君たちのさま／うつ／くしうておひ出給ふにいつれの御方をもすてかたき／ものにおもひきこえ給ひていまはさ

る方におはし／つきにたるへし君たちの御かたちのいつれもすくれ／給へるさまた、おなしものとのみ見えてとりも
たかへ／つへうものし給ふをおなし所ならましかはふよう／ならましを所／にておひ出給ふそいとよかりける／お
ほかたはた、おなしものと見ゆる御かたちの中に／若君はあてにかほりけたくなまめかしきかたそひて／見え給ふ
姫君ははな／とほこりに見てもあくよ／なくあたりにもこほれちるあいきやうなとそ今より／似るものなくもの
し給ひける
(1丁オ・2丁オ)

三

いつれもやう／おとなひ／給ふまゝ、に若君は浅ましうものはちをのみし給ひ／て女房などにたにすこし御まへとほ
きには見え給ふ／事もなく御ち、殿をもうとくはつかしくのみおほして／やう／御ふみならはしさるへき事ともを
しへきこえ／給へとおほしもかけすた、いとつかしとのみおほして／御帳のうちにのみうつもれ入りつ、繪かきひ
ひな／あそひかひおほひなとしてあそひ給ふを殿はいと／浅ましき事におほしのたまひてつねにさいなみ給へは／は
て／は涙をさへこほして浅ましうつ、ましとのみ／おほしつ、た、母うへ御めのとさらぬはむけにちひさき／わら
はなどにそ見え給ふさらぬ女房などの御まへえも／まあれは御几帳にまつはれてはつかしいみしとのみ／おほしたる
をいとめつらかなる事におほしなけく／又姫君は今よりいとさめなくてをさ／うちにも／ものし給はす^外とのみ
つとおはしてわかきめの子／なとわらはへ共とまり小弓などをのみもてあそひ給ひ／御いてゐにも人まゐりてふ
みつくり笛ふきうた／うたひなとするにもはしり出給ひてもろともに人も／をしへきこえぬ琴笛のねもいみしう吹た
てひきならし／給ふものうちすんしうたうたひなとし給ふをまゐり／給ふ殿上人かたちめなとそめてうつくしとき

こえつゝ、／かたへはおしへたて奉りて此御はらのを姫君と／きこえしはひか事なりけりなとそみなおもひあへる／殿の見あひ給へる折こそとりと、めてもかくし給へ／人々のまゐるには殿の御さうそくなとし給ふほと／まつはしり出給ひてかくなれあそひ給へと中／／えせいしきこえ給はねはたゞ若君とのみ思ひてけうし／うつくしみきこえあへるをさおもはせてのみのし／給ふ御心のうちそいと浅ましくかへす／／とりかへはや／とおほされける

(2丁オ～3丁ウ)

〔頭注〕

○かへす／／とりかへはやと／此詞をもて物語の名とせり

〔四〕

かくいひ／／てもをさなきほとは今／おのつからなとなくさめつゝ、さても有へしとをにもあまり／給へと猶おなしさまなるをこはいかゝすへきとよと／／ともになけかしきよりほかの事なかりけりさりと／／とし月すきはおほししることもとのみまち給へるを／／をさ／／なほり給ふましく見はて給ふに猶いとめつら／／しう世にためしなき御こゝちぞし給ひけるかくて今は／／かろひたる御ありきもつきなきほと御よそほしさ／／なれは殿ひろくつくりて西ひんかしのたひにふた所／／の北の方をすませきこえて殿を玉のうてなに／／みかきとの、御いてにそせられけるこれにもろともに／／さしならひて心ゆく北の方のおはせぬは猶口をしき／／事なりかし十五日つゝ、うらやみなくかよひ給ふさん／／たちをも今はやかてきこえつけて若君姫君とそきこ／／ゆなる

(3丁ウ～4丁オ)

【五】

春のつれ／＼御ものいみにてのとやかなるひる／つかた姫君の御方にわたり給へれば御帳のうちにそ／さうのこと琴を
しのひやかにひきすまい給ふなる女房／などこ、かしこにむれあつ、碁すくろくなどうちて／いとつれ／＼けなり御
帳おしやりてなどかくのみ／うもれてはさかりなる花のにほひも御らんせよかし／こうちなどもあまりいふせくもの
すさましけに思ひて／侍るとやかてゆかにおしか、りてゐ給へは御くしはたけに／七八寸はかりあまりたれは花す、
きのほに出たる秋の／けしきおほえてすそつきのなよ／＼となひきか、り／つ、物かたりに扇をひろけたるなどこち
たくいひたる／ほとにはあらてこれこそなつかしかりけいにしへの／かくや姫もけちかくめてたきかたはかくしも
やあらさり／けんと見給ふにつけては目もくれつ、ちかくより給ひて／こはいかてかくのみはなりはて給ふにかと涙
をひと目／うけて御くしをかきやり給へはいとはつかしけに／おほし入たる御けしき元あせになりて御かほのいろは／
こうはいの咲いてたるやうににほひつ、泪もおちぬへく／見ゆる御まみのいと心くるしけなるにいと、我もこほれ／
つつく／＼とこと／＼なく哀に見奉り給ふさるは／かたはらいたければつくろひけさうし給はねとわさとも／いとよ
くしたるいろあひ也御ひたひ髪もあせにまろ／かれてわさとひねりかけたるやうにこほれか、りつ、／らうたくあい
きやうつきたり白くおひた、しうして／たるはいとけうとかりけりかくてこそ見るへかりと見ゆ／十二におはすれ
とかたなりにおくれたる所もなく人／からのそひやかにてなまめかしきさまそかきりなきや／さくらの御そのなよ、
かなる二つはかりにえひそめのおり物の／うちきあはひにきは、しからぬを着なし／給へる人からにもてはやされて
袖くちすそのつままで／をかしけなりいて浅ましや尼などにてひとへにその／かたのいとなみにてやかしつきもたら
ましと見給ふも／口をししく涙にかきくらされ給ふ／

いかなりしむかしのつみと思ふにもこの世にいと、ものぞ悲しき

(4丁オ〜5丁ウ)

〔頭注〕

○御まみの／目つき也

○白くおひた、しう／けさうをあまりあつくしたるはけうとしと也

○そひやか／やせかたにたけたかき也

○この世に／子といふ事をかねたり

〔六〕

西のたひにわたり給ふに横笛のこゑすこく吹すまし／たなりそらにひゝきのほりてきこゆるに我こゝちも／そゝろしくめつらかなりこれもさなゝりときゝ給ふに／又こゝちもかきみたるやうなれとさりけなくもてなして／若君の御かたをのそき給へはうちかしこまりて笛は／さし置つさくら山吹などこれはいろ／＼なるに／もへきのおりものゝかりきぬえひそめのおりもゝのゝさしぬき着てかほはいとふくらかに色あはひいみしう／きよらにてまみらう／＼しういつことなくあさやかに／にほひみちてあいきやうはさしぬきのすそまでこほれ／おちたるやうなり見まほしく目もおとろかるゝまでを／うち見るにはおつる涙ものゝなけかしさもわすられて／うちゑまるゝ御さまをあないみしこれをもとの女にて／かしつきたてたらんにいかはかりめてたくうつくしからんと／むねつふれて御くしもこれは長きこそおとれたれ／すそなどは扇をひろけたらむやうにてたけに少し／はつれたるほとにこほれかゝれるやうたいかしらつき／など見ることにゑまれながらそ心のうちはくらさるゝや／いとたかき人の子ともなとあまたゐて暮すくろく／

うちはなやかに笑ひのゝしりまり小弓なとあそふも／いとさまことにめつらかなりあないみしのわさやさても／これはかくて有へき事かは今はともかくもしなすへき／かたのなさも今更にせめて女にとりなすへきやうも／なかめりこれれもほうしになして人にましらはせず／後の世をつとめさせんこそよからめとおほすも／心くは又さしもあらしかはかりのすくせなり／ければ今すこしいひ所あることもこそまさらめほいの／ふかき道心ならぬものから皆いたつらにしながらやみ／なんかよしなさよなとおほしくたく世に似すつたなかり／けるすくせかなとかへすくおほししらるかやうの／君たちはおのつからしとけなくもあるをこれはいと／いみしく今よりはかくしくさえかしこくおほやけの／御うしろみにおひ出給ふ琴笛のねも天地をひゝ／かせ給へるさまいとめつらかなりときやううちしうた／うたひ詩なとすんし給へるこゑはさまことにをのゝ／えもくちぬへくふることわすれぬへし何事もさらに／あかぬ事なき御有さまをかくのみおほしみたるゝそ／いとほしかめり
(5丁ウゝ7丁オ)

〔頭注〕

○まみ／目つき也

○さてもこれは／実は女君なれば也

〔七〕

かゝる御さえかたちすくれ給へる事／やうく世にきこえてうち春宮にもさはかりなに／ことにもすくれたなるを今まで殿上なともせさせす／ましらひせぬ事つきせすゆかしからせ給ひて大将／殿にもたひく御けしきあれといとゝむねつふれ／浅ましくかたはらいいたければいまたいとけなきさま／をそうしてとりいて給はぬをわらはすかためなら

／さしとするならんとてかうふりをさへおして給はらせて／とく／おとなひさせてまゐらすへきさまにのみたひ／御けしきあるにさへいかにきこえてまゐらせぬやう／あるへきならねはざりとはた、さらはあるにまかせて／あるはかりこれもさきの世のことならめはかゝるすちにても／おの／さてもものし給ふへきちきりこそはと／ひたふるにおほしなりてことしは御裳着御元服われ／と／いそき給ふ

(7丁オ―8丁オ)

〔頭注〕

○かうふりを／叙爵也

〔八〕

その日になりて此との、御しつらひよの／つねならすみかきたて、姫君わたし奉り給ひひん／かしのうへもわたり給へりおほとのに御こしはゆひ給ふ／うそ／しからぬはねちけたるとさすかにかたはらいたく／おほすなるへしか、る御事ともをきくよそ人は思ひ／よるへきことならねはた、若君姫君をおもひたかへ／き、ひかめたりけるとのみそ心えけるまれ／くはしく／しりたる人は又いかてかうちいつへきことのさまならねは／なへて世にしる人なきそいとよかりける若君の御ひき／いれはとの、御せうとの右大臣殿そし給ふ御あけまさり／のうつくしさはかねて思ひきこえし事なれといともて／はなれ世になきかたちのし給へるをひきいれのおと、の／めて奉り給ふさまことなり此おと、は姫君のかきり／そ四人もち給へりおほい君はうちの女御中の君は／春宮の女御三四の君はた、にておはするをなら／へて見まほしうおほすへしろくともおくり物など／さらに世になききよらをつくし給へりかうふりは／わらはよりえ給へりしかはたいふの君とそきこゆ

(8丁オ―ウ)

【九】

やかてその秋のつかさめしに侍従に成給ひぬ／みかと春宮をはしめ奉りてあめのしたのをとこ女／此君をひと目も見
きこえてはあくよなくいみしき／ものに思ふへかめりおほしときめかせ給ふさまやん／ことなき人の御子といひな
らいとたくひなきもこと／はりと見えて琴笛の音にもつくり出るふみの／かたにも哥の道にもはかなくひきわたす筆
のあや／つりまで世にたくひなくうちふるまひしらひ給へる／さまのうつくしきかたちはさるものにて今よりある
／へきさまにうへ／しく世のありさまおほやけこと／をさと知りたる事のさかしくすへてこと／に／此世のも
のともあらぬを父大将もさはいか、せん／さるへきにこそといふかひなければ今はやう／かゝる／かたにつけても
うれしくうつくしきことをのみ／おほしなくさみゆくを此君猶をさなきかりは／我身のいかなるなとたとられす
かゝるたくひも／あるにこそはと心をやりて我心のまゝ、にもてなし／ふるまひすくしつるをやう／人の有さまを見
／き、しりはてもの思ひしらるゝまゝ、にはいとあやしく／浅ましう思ひしられゆけとさりとて今はあらため／おもひ
かへしてもすへきやうなけれはなとてめつらかに／人にたかひける身にかとうちひとりこたれつゝもの／なけかしき
まゝに身をもておさめてものとう／もてしつめつゝ、ましらひ給へるよそひなるといゝとめて／たきをその時のみかと
四十よはかりにていとめて／たくおはします春宮は廿七八にて御かたちなども／たゝ、わうけつ正きけたかくおはします
か此いもうとの／君の御かたち名தாகくすくれてきこえ給へはいづれ／も御心をかけておほせ事あれとせんかたなき
御／ものはちにことよせておほしもかけすけにさやう／にももてかしつきてあらましかはいみしき御物／おもひな
り

(8丁ウ・10丁オ)

【10】

みかとはうせ給ひにし後の御はらに／女一の宮ひとりおはしますをあはれに心くるしき／事に御目はなたすもてかし
つき奉らせ給ふさら／ては内春宮にもをとこのみこのおはしまさぬを／あめのしたの大事にてわれも／と御いのり
ひま／なし右大臣殿の女御やんことなくてさふらひ給ふ／めれと一の人の御むすめならねは后にもえぬ給は／すみか
とは此女一宮の御事を朝ゆふにうしろ／めたくおほしなきて此侍従のありさまの／この世のものとも見えすなりゆ
くを此宮の御うし／ろみをせさせはやと御らんするたひことに御目と、／まるさはいへ御うしろみのはか／しから
ぬけにや／またいとわかくあふなくおはしますをいもうとの君の／さはかりめてたかなるに見ならひてめさましき心
もや／御らんせられんとまたいともけなきほともすこし／もの／しきほとに見なしてなとそおほしめしける／か
やうの御けしきをもりき、給ふにも殿はむねうち／さはきてあはれか、らさらましかはいかにめいほく／ありうれし
からましと口をししく心うきものから／すこしほ、ゑまれてそき、給ふ侍従の君はいと心／かしこくかはかりのほとに
も似すあるへかしくめて／たくうちわたりにも御かた／の女房などとは見る／ことに心けさうせられて露のひとこと葉
もいかて／かけられしかなと見えしらかひけりよからぬ身を／思ひしりなからありそめにける身をえもてかくし／や
るかたなくてましらふにこそあれなにかは目の／とまらんとまめやかにてもておさめたるをさう／／しく口をし
とおもふ人おほかり

(10丁オ～11丁ウ)

【11】

その比の／みかとの御をちに式部卿の宮ときこゆる人の御／ひとつ子の君此侍従の君にはふたつはかりのこのかみ／

にてかたち有さまいと侍従のほとにこそにははね／なへての人よりはこよなくすくれてあてにをかし／心はへたとしへなく、らぬくまなくこのましくなよひ／なまめかしくて思ひいたらぬかたなき心にてこの／との、姫君右のおと、の四の君さま／に名たかくいはれ／給ふをいつれをもいかでと思ふ心ふかくてさるへき／かたよりあなかにたつねよりつ、心のかきりかきつくし／いられわふれと人からのいとあたなるに露のことも／あなゆかしといつかたにもおほしはなれて返り事／する人もなきをわりなくなきつ、此侍従のあまり／いみしくものまめやかにみたる、所なくおさめたるを／こそあまりさう／しきやうなれとみるめかたちの／似るものなくあいきやうこほれてうつくしきさま／のか、る女のあらましかはと見るたひにいみしくおも／はしきをいもうともかくこそはものし給ふらめ女は／今一きはまさらんほと、思ひやるに見奉らてやむ／へきこ、ちもせすわひしきま、に此君をいとよく／かたらひて思ひあまる時は涙もつ、ますうれひ／泣かたらへるさまの人よりすくれて哀になまめき／たるをいとほしくあはれにこと人よりはなつかしく／うちかたらひなから我はいとうちとけむつひられす／うちいつることには人の御身のよつかさりける事のみ／しらる、にむねうちつふるれはいたくもあひしらはす／ことすくななるほとに心はつかしくのみもてなしたるを／ねたくうらめしと涙をもつ、ます思ひいられたる／けしきの心くるしさを見ることに／

侍従

たくひなくうき身と思ひしるからにさやはなみたのうきて流る、

とそこたへまほしけれと何事をさへ思ふそと問ひか、らんも／のかれ所なければ只なさけなくもてすくよかなる／さまにてそたち別れける

(11丁ウー12丁ウ)

〔頭注〕

○たとしへなく／是は表裏にたかひたる事也侍従の君とは心はへ異也といふ心也

【一二】

かゝるほとに／みかと御こ、ち例^(地)ならて久しくなりぬるはさるへき／にこそはあらめいにしへもさるためしなくやはとおほ／して春宮に御位をゆつり給ひて女一の宮を／春宮にすゑ奉り給ひて我御身はすさく^{朱雀}院に／おはします大殿も今は御とし七十におよひ／御やまひもおもくのみおほさるれば御くしおろし給ひて／この殿左大臣になり給ひてそ関白し給ふくきやう／つき／に成あかりてとの、侍従三位して中将に／なり給ひぬ
(12丁ウゝ13丁オ)

【一三】

右大臣との、女御后にる給はすなりぬる／をあかす口をし／おほして此中将の人からもいと／こよなくまさりていさゝかあた／しくかろひたるふる／まひなとすともきこえぬにます事あるへきなら／ねは四の君をそれにおほし／ためて父おと、にも／きこえ給へはをかしとおほしなからなにかはいかにいひ／てかあるましきことゝはものせんとおほしていかなるにか／かやうによつきたる心はゆめにも侍らさめるはさりと／まめやかなるかたはかりはいとよく人に御かむせらる／へきものに侍らめとうけひき申給ひつ北の方にかくなんと／のたまふにこめかし／くからむ人のむすめのあやし／なんと思ひとかめいふへきならずた、うちかたらひて人目／をよのつねにもてなしていていらせましようち笑ひて／よきうしろみなりとのたまふまたいとわかくおはすれば／うしろめたかりぬへけれとあふなくはまたおはすへくも／あらぬさまなれば心やすくて御ふみか、せ奉り給ふなに／こともおほしわかすをのことものなかにもこのもしく／のみき、ならひ給へればけさうのかたにこそはとて／

中将
これやさはいかてしけきは道ならむ山くちしるくまとはるゝかな

とかき給へるえもいはすめてたき^(見)みのなり御としの／ほとおほすにいかてか、りけんとをかくもあはれに／も涙くまれ給ふ右のおと、にはからうしていひおもむけ／給へる事なれは御返りことそ、のかしてか、せ奉り給ふ／

^{四の君}ふもとよりいかなる道にまとふらんゆくゑもしらすをちこちの山

かくて後は常にきこえ給へはわれす、み給ひにしことなれは／その日とおほしたちになりいとやんことなき^(本)ほいおはする／人にてすくれてかしつききこえ給ふ御むすめのこと／との、三位の中將をとりよせ給ふ御けしきありさま／
なにも事なめによろしからんやは
(13丁オー14丁ウ)

【一四】

其比の大納言なく／なりたれはしたいに成のほりて権中納言にて左衛門督／かけ給ひついと、はなやかにめてたしともおろかなり式部／卿の中將もかけなく宰相になり給ひぬれとかた／つく／しつる心のひとかたはかくし^{引哥}はやくけふりにき、なしつる／ことをよろこひもなにも思はぬかほにゆきあふ折／は／すこし心をくけしきになけしめたるを中納言は／なそやかく思ひ入たる人をかひ／しく見たまはてと／をかくし思ひ給ひけり (14丁ウー15丁オ)

【頭注】

「しはやくけふり」——引哥／○須磨の浦のしはやくけふり風をいたみおもはぬ方にたな引にけり

【一五】

中納言は十六女君は十九にそ／おはすれはかたちも心もかたなりなる所なくよきほとに／としよりはしめあかぬ所な

くめてたくてあね君たち／よりもこよなくをやたちのおほしかしつきつるわか／心おこりも人しれすかみなき位にも
およふへき身と／おほしつるにこよなくあさはかなるこゝちするをけしき／にこそ出し給はねとかくやはものをと心
のうちにはうち／なけれなからもたゝ人からのいとをかしくすくれて／うとましきもてなしもなかつたゝいとあはれ
けにうち／かたらひつゝ、見なるゝまゝには思ひもおとされ給はさりけり／よるの衣も人目にはうちかはしなからかた
みにひとへの／へたてはみなありてとくるかたなきもふかくはいかてか／しる人あらんいと人目に見えていまめかし
くまろはれ／給ふことはことになくたゝあてやかにめやすきほどの／御なからひに見ゆるはかはかりあかぬ事もなき
御あり／さまを幾千代かさぬともあくましきをおもふほと／よりはと見ゆれと男君はまたいとわかきものし給へは／
さこそはすくし給へともものつゝ、ましくおほさるゝなめり／なとつみもなくことはりてもてかしつき給ふさま世に／た
くひなしまたけさうかましくゆきたはふれにたる／けしきはたゆめにもなくおほ殿うちの御あそひなど／よりはこと
なるよかれなともし給はぬをたゝ月毎に／四五日そあやしく所せきやまひの人に見えつくろふ／へきにあらぬをも
のゝけにおこる折／の侍れはとて／御めのとの国にはひかくれておはすそいかなる事そと／心おかるゝふしには有
ける

(15丁オ―16丁オ)

〔頭注〕

- かみなきくらゐ／后にもといふ事也
○所せきやまひの／実は女君なれば月のさはり也

【一六】

九月十五日月いとあかきに／御あそひにさふらひて御とのゐなる夜梅つほの女御の／まうのほり給ふをわざとゆかし
くはあらねと藤つほへ／とほるへいのわたりに立かくれて見れは更ぬる月の／くまなくすめるにひとりもたるわらは
のこきあこめに／うすものゝかきみなめりすきとほりたるにかみいとをかし／かゝりてあゆみ出たり女房もみなか
うちたるきぬに／うすものゝからきぬぬきかけたりたゝ今のそらおほえて／おかしく見ゆるに女御は御几帳うるはし
くさして／いみしくもてなしかしつかれ給ふさまのこゝろにくゝ／めてたきをあはれ我もよのつねに身をも心をも／
もたらましかはかならずかくてそおりのほらましあな／いみしひたおもてにて身をあらぬさまにましらひ／ありくは
うつゝの事にはあらずかしと思ひつゝくる／にかきくらさるゝ心地して／

中納言
月ならはかくてすままし雲の上をあはれいかなるちきりなるらん

われこそちきりつたなくてかゝらめ姫君たよのつねにて／かやうのましらひし給はましをあかぬ事にてなるゝまゝ、
／に身をなけきてもひとりはやのつねにておはすと見て／こそはかやうのおりのほりのかしつきもせましなど我身／
ひとつのことを思ひつゝくるにこれよりいてゝやかて／ふかき山に跡たへなまほしくおほゆるまゝにとはかり／見送
られてありつるひとりことを思ひつゝくるほとに／ほとらひとつの月と聲は似るものなくすみのほりたるを／宰相の
中将もこよひの御あそひにさふらひてたゝ今は／たゝひとかたに大とのゝ姫君の御事を思ひこかれて／例のかひなく
とも此中納言にうらみもまたよになきかたち／けはひも見まほしきにもなくさめんと思ひてまかて給はす／なりぬる
をいつくのくまにはひかくれて見へぬならんと／うかゝひありきけるに此聲をきゝまとい尋ね来て／見れはおりも
のゝなほしさしぬきにくれなゐのつやの／こほるはかりなるをぬきかけていとさゝやかに見ゆれと／わかくをかしけ

にて月かけにひかるはかりめてたく見えて／つねよりもうちしめりたるもてなしけしき袖ぬれ／わたるに例のしめたるにも似すよになきかほりなるを／をのこの身にたにめてたく見ゆるをまいて此人の「こと」もかけよらんをき、しのひにけん人はあらしかしとすら／やましくわか身はつかしけれとひきと、めてわりなき／事をうらみいふもいとゑんにをかしうなまめきたるは／いとにくからず

(16丁オ―17丁ウ)

〔頭注〕

○ひとりこと／是は前の月ならはの哥也夫々とうの月まで打すんし給へる也

〔一七〕

人はいかにもすへて身にならはしそめ／かたらひなとせすいとあまりものとほくのみもてすくる／心にも此人はかりはさしはなちかたう哀なれはかうのみ／のたまふをなへてことよき御月くさのうつりやすさは／うしろめたけれと心くるしう思ひきこえさする折／侍れとみつからの心にまかすへきかたなきことにて／た、かくのみうけ給はるこそかひなくいとほしけれとうち／なきて身を思ひしりつるなこりいたくなかめいる／けしきかはかり思ふ事なける身に何のあかぬ／こと、よと、もになけかしきならんあまりことさらひ／まめやかなるもいみしう思ふ事のあるなめり見る／人とてもあかぬ事ありとはきかぬをつねのことにそれ／をはめならしていかはかりの事のかくはおほゆるならん／この比の春宮などの御事かそれも此人の御身にはいと／いみしう有かたかるへきならすいたくつ、むことある人の／ことの外に哀なるかなとおしはかりけしきとりてよろつに／とりなしいひおほさむ事は身にかへてもたはかりけしき／とりてかなへ奉りてん深くへたて給へるこそとすらむるに／こたへんかたもなければ我身にとりてきこえ

あはせたらん／にしかやすかりぬへき御心なめりとうち笑ひて／

中納言

そのこと、思ふならねと月見れはいつまでのみかものは悲しき

こたへたる声もいみしうにほひありなつかしうおほ／ゆるにいまめかしきくせはほろ／と泣れて／

宰相中将

そよやその常なるましき世中にかくのものを思ひわらん

いとつみ深くのみ思ひしられ侍れは此御けしき見はて、／ふかき山に跡を絶なと思ふとかたらへはそはしもさ／おほしたらん時はおくらかし給ふなよいかてかくて世には／あらしとそ、ろにおほゆる心のとし月にそへてもまさり／侍れとさすかにえこそ思ひたち侍らねと哀にうち／かたらひあかしておの／／まかて、も此中納言よろつ／めてたくすくれたる中にもけちえんにこまやかなるけはひ／などの女にていみしう見まほしうをかしうもあるかなと／戀しきにそいと、いもうとの姫君は思ひやられける

(17丁ウ―19丁オ)

二八

かく心をつくし思ひまとへとかけてもなすらひにき、／いるへきけしきならぬをいかにせんとおもひわふるに／院のうへ春宮を今は立はなれてちかくもえ見奉らせ／給はぬを御めのとなといひてもはか／しくも心はせ／ある人もさふらはす我御身つからはいとものはかなく／いとけなくのみおはしますをうしろめたくおほつかなく／おほしなけきこえさせ給ひて此大殿の姫君むこ／とりうちまゐりのかたは思ひ絶てきこしめすを此／御うしろみにせはやおほしなりてまゐり給へるに／御物語などこまやかにきこえ給ふつゐてに中納言の／いもうとはいかにしなさんと思ひおきてられたるそと／とはせ給ふ例の猶御けしきあるかとむねつふれて／いかにも／思ひ給へすをやと申せと浅まし

ううとく／はつかしきものに思ひて見え侍れはあせになりてこゝち／さへたかへたる人なれば尼などになしてそのかたにおも／むけてやみなましとのみなん思ふ給へなりにとて／うち泣給ひぬるをけに世をのかれんとはあらざり／けりと哀に御らんしてそれいとあるましき事なり／春宮はかゝしき人なくおのれを立はなれていと心／くるしきをその君御あそひかたきにまゐらせ給へ／世中にとまかくもあらは后にはゐ給ひなんとおほせら／らるゝに中納言の事おほし出られてこれもさるへき／やうこそあらめとうれしくもめつらかにもさま／御心／みたれてけにさほとのましらひはつかうまつりもや／せんとて母なる人にのたまひあはせんとてまかて給ひぬ／うへにかくなときこえ給へはいさやいかなるへき事にか／と思ひさためられてなんとこのたまへは中納言の／有さまを見ればこれもかうさまにてよかるへきにもや／あらん仰事たかへすけに後の位にさたまり給ふやうも／ありなん思ひの外にめてたき事にてこそはあらめと／おほせはあらまし事にもむねうちさはき給ふや／御いのりさま／にせらるおなしくはとくとおほせらる／れは十一月十日比にまいらせ奉り給ふなにかは／あかぬことあらん女房四十人わらはしもつかへ八人めてたく／たゝかしたてゝまゐらせ給ふによのつねなるへき／御ましらひにもあらぬにその事となくてさふらひ／給はんもそゝるなれば内侍の督になりてそまゐり給ひ／ける

(19丁オ―21丁オ)

〔頭注〕

○御身つか／春宮也

○まゐり給へるに／左大臣のまゐり給へる也

○御あそひかたき／御あそひ相手といふ事也

○うへに／北の方也

【一九】

春宮はなし壺におはしませは御つほねはせん／宣／耀／殿／ようてんにせられたりしはしはよる／のほりてひとつ／御帳に御とのこもるに宮の御けはひ手あたりいとわかく／あてにおほとかにおはしますをさこそいみしうもの／はちしつ、ましき御心なれと何心なくうちとけたる／御らうたけさにはいとしのひかたくてよる／御とのゐ／のほといか、さしすき給ひけん宮はいとあさましう／思ひの外におほさるれとみるめ見のけはひはいさ、か／うとましけもなく世になくをかしけにたを／と／ある人さまなれはさるやうこそはとひとへによりき御あそひ／かたきとおほしまとはしたるよになくあはれにそ／おほえ給ひけりひるなともやかてうへの御つほねにさふらひ／給ひて手ならひ絵かき琴ひきなど起ふしもろとも／に見奉るによろつつ、ましくはつかしきものとうつ／もれしほとにつれ／よりは何事もまきる、こ、ち(地)／し給ふ今とてもわつらはしき思ひあるましきならね／は宮の宰相もはなれす中／さひしきまとの内に／こもり給へりしほとこそ思ひをはこふかたなかりしか／中／か、るかたにたち出給へるはいとうれしくて／よるひるせんようてんのわたりをはなれすおほかたの／けしきをも見るにけたかうもてなしたるさまおほかたの／おほえよにもいみしきをいかならん世に我おもひ／かなへんとのみぞ思ひける

(21丁オ～22丁オ)

【頭注】

○さしすき給ひけん／内侍実^ニは男君なれはけさうたち給ひし也

○うへの／春宮也

その年の五節に中院の／行幸ありければみな人々を小思み奉る中に宰相中将／權中納言の青すりいと、いみしう見ゆ宰相
はいと／そゝろかにを、しくあさやかなるさましてなまめかしう／よしあり色めきたるけしきいとをかしう見ゆ中納
言は／はな／と見れとも／あくましうにははしくこほる／はかりのあいきやう似るものなきにもてなし有さまも
／さはいへとなこやかにたを／といとなつかしきほとの人によなくすくて目もあやなるを御かたの人々／を
かしと見るに宮の宰相はいさ、かも人のけはひする／所はた、にも過すかならすたちとまりものなといふを／中納言
は見みるめにたかひて宰相のゆきもやらすと、／こほりかちなるをしり目めに見おこせつ、すきぬるを／桧のくま川なら
はしはし水かへともうちいてつへく／みな見おくらる、中にもしみていみしと思ふ人あり／けりみするしんのたちお
くれてまゐれる申へき事／ありかほにけしきはみてさふらへは何事そとはせ／給へはれいけい殿の細との、一のく
ちにうちまねき／と、めてまゐらせよと侍りつるといみしうえんなる／ふみとりいてたりあなおほえなとて見給へ
は／

あふ事女はなへてかた木のすり衣かりめに見るそしつ心なき

といとをかしけなるをあやし誰ならんとうちほゝゑまれて／さはかしければ返り事もせずなさけなくいとほしきに事
／はて、皆人もしつまりぬるに夜ふかき月のいとあかう／すめるにれいけいてんのほそとのをとかくた、すみて／

中納言
あふことはまた遠山のすりめにもしつ心なく見けるたれなり

とうそふくに人声もせず人もなきにやと思ふにふみ／いたしつる一のくちに／
め女つらしと見つる心はまかはねとなにならぬ身のなのりやはせし

とこたへたるけしきもなへてならすをかしかなり立よりて／

中納言

名のらすは誰としりてか朝くらやこのよのまにもちきりかはさん

こやかた木のすり衣なりけるなとそこはかとなくいひすさむ／けはひのちかまさりはたなつかしういみしくあいきやう／つきたるをいと、心にしみてをかしと思ふにのとやかに／たち給へるいか、あらんといとつ、ましさいやましければ／よのつねにみたれいりなとすへきさまあらず女御の／御おとうとやうの人なるへしなへてのけしきならずと／見らるれはなさけなからぬほとにかたらひて人々の来る／音すれはうち忍ひてたちあかれぬかやうにひと目も見る／人の心をつけてまちおほさん所も人のき、つたへん事も／しらすきこえこちかくるあまたあれと人のほとかららか／ならすいとをかしかりぬへきはなさけなからぬほとに折く／いひかはしさらぬかきませのほとはしらすかほにてき、／すこしいとこよなく物とほくもおさめ給へるを玉の／きすとあかぬ事に思ふ人々あり此宰相のあまり／すくさす尋ねよりいひか、りうか、ひありくをおかしと／思ふ人多かりけり

(22丁オ～24丁オ)

〔頭注〕

「桧のくま川」――引哥／さひのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへかけをたに見ん

「かた木のすり衣」――○かた木は衣をする型木也それを難きにいひかけたなり

〔二〕

その年たちかはりついたち比霞める／空は春のけしきとのみ見えなからまたふる年に／かよふ雪うち、りおかしきほとにせんえうてんに大との／まゐり給へれは中納言さふらひ給ひけりさとの御すまひにて／はいにしへはうへたちの

御いとみ心のなこりことの外にうと／＼しかりしかと此ふた所のほかには又たくひも／なし我世もしらぬをよつかぬ有さまをもこと人にいひ／あはせ給はんよりはかたみにうちかたらひつゝはすくし／給はめといひしらせつゝおの／＼をよすけ給ひしより／みすのうちはいれ給ひしかとことの外の御物はちに／もやのうちのみすのへたては猶あつかりしをうちに／まゐり給ひてはおりのほりの御かしつきのほとにけち／かくならひかんの君も世をおほししりやう／＼おもなれ／ゆく心にや今はた几帳はかりのへたてにてもなと／いとなつかしうきこえ給ふ世に似すをかしき御けはひ／などを我身はさるものにいひ置て此御有さまを／たに例の人と見奉らはやとあかす悲しうおほす／かんの君も此御ありさまを見るたひことにむねうちつふれ／てかたみにおほしみたるゝ心のうちともおのつからさる／へきほとゝいひなからうとからす哀もふかりけり御／しつらひはこうはいのおり物の御帳御きは見えなる／女房などは梅の五つ重をひとへうちかさねつゝ、こう梅の／おりものゝからきぬもへきのみはの色あひもよにつくし／てかすもなくなみさふらふに中納言むらさきのおり物の／さしぬきくれなゐのいろ深くつやこほるはかりなるを／いたしてさやかにつゐる給へるかたちのつねよりもはな／＼とあたりにこほるゝあいきやうみまほしくなつかしけなる／こといとたくひなきを例のよとゝもにむねあくよなき／とのゝ御心のうちなれと見るにはうちゑまれて物思ひも／わするゝ心地して御帳のうちをさしのそき給へれば／紅梅のうすくうへにほひたる御そともにこきかい／ねりさくらのおり物のこうち小紅梅かさねの御扇を／もてまきらはし給へる御かたち中納言の御かほの／にほひをうつしとりたらんほとに見わきかたきまで／かよひ給へれとこれは今すこしあてにかほりなまめき／たる所やこよなくをかしからん御くしはつや／＼とまよふ／すちなくゆるらかにかゝりてたけに二尺はかりあまり／給へるすゑつきの白き御そにけさやかにもてはやされ／たるなといつくともなく絵にかきたるほとなるを見る／ことにあないみしとむねうちふたかり

て此御有さまの／よろしやかにあかぬ所あらましかはさはれや尼法師に／なしてふかき山に跡たえ給はんこともあらしき思ひ／はうすくやあらましかくすくれ給へる御さまともに／つけてはうれはしうも悲しくもかた／もろき泪そ／こほる、
(24丁オ～26丁オ)

〔頭注〕

○うへたちの／母君たち也

○例の人と／実は男なれば則男にて見奉らはやといふ心也

○御きは見へなる／御側つかへ也

「よろしやかに」——○此よろしやかと云は一通りならはと云意也

〔三三〕

くれて月いとあかきに御琴の音はいかゝなり／たる中納言の笛のねにあはせてうけ給はらんとてさうの／御琴そゝのかしきこえ給ひて中納言に横笛奉り給ふ／例のすみのほりをかしけなるねのはるかに雲井を／わけてひゝきのほるやうにおもしろういみしきを涙／とゝめかたきにかきあはせ給へる御ことのねおとらす／かきりなきをあたりもさらぬ宮の宰相立き、けるに／笛のねもことの音もいみしの事や此世のものならぬ／いもせの御さえともかなかたち有さまもかくこそはあらめ／ときくにそゝろに泪こはれてしのふへくもあらねと／まやのあまりをうちうそふきてそりはしのかたに立／いてたれば中納言ひはを笛にとりかへておしひらきて／きませとかきならしたなりとはかり帳ならぬこそわひし／けれとて心ときめきせらるれとおとゝのうと／しき／さましていてゐ給ひぬれはかひなく口をしょうてい

と／すぐよかになりぬこと殿上人かんたちめなとまりて／御たいめんあるにも宰相は有つる御琴のねのみ耳に／つきてさはかり何事にもよのひとつものなる中納言の／めうつしにはいかはかりならん事の御耳にもと、まり／なんと思ふにいとねたく口をしようて琵琶奉り給ふを／わりなくすまひ給ふ女房など中納言殿にこそひとし／からねなへての人にはこよなくすぐれたるをいと／なつかしうをかしと見けり
(26丁オ―27丁オ)

〔頭注〕

「まやのあまり」――○東屋のまやのあまりの雨そ、き我たちぬれぬその戸ひらかせ／此哥をうたひて也

〔二三〕

おなしみかきのうちに／なりては時さかやうのことのねをきくにも岩うつ浪／のとのみ思ふことのかなふへきよはなけなるを思ひわひて／霞わたれる月のけしきにも心のみそらにあくかれ／にたるをなめわひて例の中納言殿にかたらひてなく／さめんとおほしてさきなどもこと／しうもおはせず／しのひやかにておはしたれば例ならすしめやかにて／うちの御とのゐにまゐらせ給ひぬといふかかひなくち／をしうちへやまゐらましとなかむるにさうの琴／の音ほのかにきこえたるにきと耳とまりてさならん／かしと思ふにこれも浅からす心をみたし、人の／しほやくけふりに成にしそかしと思ふに今とても／おもひはなたぬ心はむねうちさはきてとかくまきれ／よりてかいはめはしちかくすたれをまきあけて／ひきいてたるねをきくよりも月かけにいと身もなく／きぬかちにてあゑかにうつくしうなまめきたるさま／内侍の督ときこゆともかきりあればこれにはいか、／まさり給はんとするすぐれたる名は高けれといとかくは／思はさりしをまことにいみしうもありけるかなと思ふに／又たましひ一つは此人の袖のうちに入ぬる

心地して／見すきてたち帰るへきこ、ちもせずつしこ、ろも／なくなりにければさはこよひいなりと思ふに夜更
れは／人／はとかくよりふしあるは庭において花のかけに／あそひなとしてまへには人もなきに琴のうへにかたふ
き／かゝりてつく／と月をなかつて／

中納言方
春の夜も見るわれからの月なれは心つくしのかけと成けり

とひとりこちたる父は、とてもあまたの中にすくれたる／思ひかきりなかり見る人とてもさはかりめてたくすくれ
／てゆきわつらふ所もなくいとあまりよつかぬまでまめ／やかなるを何事の心つくしなるにかときくにいよ／す
くしかたく成まさりておしあけてつ、ますあゆみ／入給ふを人／は中納言のおはするとおもひておとろ／かぬにふと
よりて／

宰相
わすられぬ心や月にかよふらん心つくしのかけと見けるは

けはひのあらぬに浅ましとあきれてかほを引いれ給ふ／をかきいたきて帳のうちにゐて入ぬやおほゆる／やうにし
給ふをまへ近き御めの子の左衛門といふ人／き、つけてとの、おはしまあつると思ひつるをいかなれは／とおとろ
きてよりたるにいひやるかたなくいみしき御けし／きなるにしのひやかに泣給ふけはひなるをあな心うや／いとつら
くおほしすてしかとしふねき心にかれぬ／御ちきりはかゝるにもありけるそかしいかにおほすとも／今はかひ有へ
きことかはた、さりけなくてをとし／らへ給ふにその人なりけりときくも浅ましういみし／けれともけにいふかひ
なければ人にたにしらせしと／思ひて御まへにはいらせ給ひぬなりまろは御まへに／さふらはん月をも花をもよく見
あかし給へといえはわかき／人／はれしれんにこそといひなからあそひいてぬ／めり女君は中納言にならひて人
はた、のとやかに／はつかしううちかたらふことより外にはなきものとのみ／おほすにいとおしたちなさけなきもて

なしなるに絶いり／ぬはかり泣しつむけはひ有さまのかきりなくあはれに／らうたけなるにかくて後も心やすくあひ
見さらん事の／わりなきに猶中納言はあやしかりける人かないみしう／まめなるは此人に心さしのたくひなきとのみ
思ひ／しをさまことなりけるひしり心にこそ有けれとめつらか／にもさま／おほゆ
(27丁オ―29丁ウ)

〔頭注〕

「岩うつ浪」―引哥／○風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけてものを思ふ比かな

○さならんかし／中納言の北の方ならんと思ふ也

「しほやくけふり」―引哥／○須磨の浦の塩やくけふり風をいたみおもはぬかたにたな引にけり

○かいはめ／垣間見也

○見る人とても／中納言の事也

「月をも花をも」―引哥／○あたら夜の月と花とをおなしくはあはれしられん人に見せはや

○ひしり心／北の方のいまた男にあひ給はさりしをいふ也

〔二四〕

あふ人にしもあらぬ夜をまいてはか／なう明ぬなり左衛門いられわふれはいてぬへきこ、ちも^(地)／せねとさりとてある
へきならねはなく／心のかきり／たのめちきりていて給ふこ、ち夢のやうなり／

^{幸相}
わか為はえにふかけれはみつ瀬川のちのあふせも誰か尋ん

猶おほししらぬこそかひなけれといへといらへもせず左衛門に／いみしきこと、もかたらひてたちかへりても夢かと

／たにえ思ひわかすよ、となかれぬ女君はまして浅ま／しううつ、ともおほえぬ心まとひにきえいるこ、ち／してお
きもあかり給はねは御心地のわひしきにやなと／人々見奉りあつかふに中納言うちよりまて給ひて／いり給へるに
いと、いかて見え奉らんとわひしきま、に／ひきかつき給へるをなとかくはと問ひ給へは御まへなる人／よるより例
ならすおはしましてなるときこゆれはいと／ほしく心くるしうおほしてそひふし給ひていかにおほ／さるゝそ今まで
御せうそのなかりけるよなといとなこやか／にあてはかに見あつかひ給ふにつけてもいと、めつらか／なりつるけ
しきはふと思ひ出られてむねふたかりぬ／

(29丁ウゝ30丁ウ)

二五

うへもいかなる御こ、ちなとおほしさはきてまつり／はらへなにやかやとさはかしけなれは中納言もたち出／給はす
そひみ給へは左衛門かもとに立かへりひまなき／御ふみをたに見せ奉らす跡たへたるまゝに宰相の君は／月比の物思
ひにいよ／かさねつる心地してわひしく／たへかたくかくてはいきめくるへきこ、ちもせずとし比／もの、いとか
くおほえましかは今までいきめくらましや／はとおほえてこれかれまとへとすへきやうもなし左衛門か／もとには日
に千たひみくらの山の所なきまでかきつくし／給ふをわかやかにもの深からぬこ、ちにはえもいはす／あてになまめ
きたるけしきしていのちも絶ぬはかり／泣わひ給ひしあかつきをいと浅からす心くるしと／見奉りにし心のしみにし
かは御ふみのひまなきことの／はなと哀に悲しけなるもいとほしくはなちかたく／色めきたる心には思へれはいと夢
のやうなる事ののち／そのまゝにいみしくおほしいらせ給ひて御こ、ち例／ならすものし給へはとの、ひまなくそひ
おはしてかひ／なきまでもえ此御ふみをひきいてぬよしをおなし／さまにかきおこすけにさもあらんかしときえいり

ぬはかり／なりしけしきも思ひ出るにうらめしさもわすられて／戀しく悲しきにわれもおきあかりありきせんことも
／おほえすつく／とおきふしなけきわひつゝは／さても中納言の浅からす見えなからいかなりける事／そとよ有し
よのほともこそ中納言も泣しつむらめ／おほかたの人からはいとめてたく目もあやにすくれて／なつかしうあいきや
うつきなからかやうのかたはあなかに／もとねたくうち思ひはなちてなさけ／しくもてなし／すくすなりつらむ
かしと思ひやるもいとめつらかにあり／かたかりける人の心なりいまより後うちやとめけんとおもひ／やるさへむね
打ふたけはいかにかまへてぬすみいて、し／かなと思へとかけても我に心をはし露のことはも／かはさはこそあ
らめさりとてひたふるにみたれ入るへき／やうもなしさはかりこめかしくあゑかなりつるけはひ／有さまには中納言
のめてたくなよひかになつかしうた、／うちかたらふのみこそ哀に心につきて思ふらめ我をは／なさけなくうかりし
と思ひ出給ふらんとおもひやるに／涙もと、まらす月を見るにも見るわれからのひとり／こちし思ひ出れはかき
みたるこ、ちこそせらる^(通)

(30丁ウゝ32丁オ)

〔頭注〕

「見るわれからの」——○前の春の夜も見る我からのとよみ給へる哥也

〔二六〕

中納言は／さしてそのこと、おとろ／しからぬ御こ、ちにて過ゆけは／さのみもえこもりぬ給はす大殿うちなどに
まゐり給はん／とてかくのみはれ／しからぬ御こ、ちをありき侍らん／ほとこそいとしつ心なかりぬへけれよのつ
ねにおきあかり／なとしてこ、ろみさせ給へ何事もおなし心にきこえ／給はせてすくしつるこそはいつまでと心ほそ

くおほ／ゆる道のほたしにもまつ誰よりも引と、めらる、／こ、ちし侍りつれかくてのみしつみふし給へるを／見侍
れはいか、なからふへくも侍らすものむつかしう／おほえ侍りと御くしをかきやりつ、はな／とにほひ／みちたる
御かほに泪をうけ給へるまみのけしきいみ／しう哀なり女君いさ、かを、しくあら／しき／けはひもなくた、うち
かたらひてすくしつるはつゆ／にても心おくふしましりてもおほえさりつるを我世／にしらぬうきちきりゆへ此人に
もへた、りおほえぬへき／こと、おほしつ、くるにこたへもやり給はすいと、かほを／引いれて泣給ふけしきなれは
心えかたくもし我を／おろかなりなと人のきこえたるにやといとほしく心／くるしければうちなきていとうまか
て侍りなん／御まへに人多くさふらひ給へもの、のけなとのするわさ／なめり心えぬ御けしきのましるはいひおき
て／いて給ひぬ

(32丁オ―33丁オ)

(二七)

内にまゐり給へれは内侍のかんの君の御方／に女房なとめつらしかりきこえて日比の物かたり／なとするにそのつゐ
てに宰相の君といふ人いかにそ／さとのしるへにあらぬ身のつねにうらみらる、かむつかし／さにゆつりきこえてし
みやことりはあなつらはしわた／くしのこ、ろさしそへられしとにや此日ころはおとなき／こそめやすく侍れとこま
やかに笑ふ弁の君その宰相は／なやみ給ふ事ありとこそいふなりしかけにひまなく／ゆきあひうるさきまでおとつ
る、人の此日比音なき／うへなりけれいとほしかりける事かなとき、おとろかれ／てうちよりまかて給ふま、にたち
より給へれはうち／きくにむねつふる、ものから浅からすおとろかれてたい／めんし給へれは日ころ例ならぬひやう
さにかゝり侍りて／とちこもり侍つるかいふせさにうちにまゐりて侍り／つるにいたはらせ給ふ事ありて久しくまゐ

らせ給は／すといふ人の侍りつれはおとろきなからとのたまふに／かほあかむこ、ちしていと、しつかならぬ心のうちなから／わさどこと／しかるへきにも侍らねとみたりかはしう／おこりたち侍りぬる時はかたうこきなともせられぬ／くせにてゆてなとし侍るとてもりぬ侍りそのもの／せさせ給ふひやうさ誰にかといふにもうちわすれてひか事／もしつへしこと／しからすいひなせといいたく青み／おもやせて例は見るたひことにうるさきまてよろつに／かたらひみたる、に事すくなにしめりたるはけにおほ／ろけならすこ、ちのあしきなめりと見ゆるもいと／ほしけれと女君の例ならぬけしきのおほつか／ければまことに御けしき猶例ならすけなり瀧の／よとみはつかしけなるまでもやせ給ひにけるかな御こ、／ちのくるしきにはあらしいかなる御心のみたれそとうち／ほ、ゑみていひあてたるにおもてあかむこ、ちすれとこれ／にそうち

〔頭注〕

「さとのしるへに」―引哥／○あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

〈錯簡〉 本文↓38丁ウ「(これにそうち) わらはれて……」

〔二八〕

〈錯簡〉 本文↓38丁ウ「かくのみなけき……」

〔二九〕

思ひよりにけると我ほめをしいひちらしぬ／給へるもいと哀なり

(34丁ウ + 39丁ウ + 41丁オ)

〔錯簡〕 本文↓39丁ウ「めてたかるへき事なれかしこく(思ひよりにける……)」

【三〇】

中納言の御ものまゐらする御まかなひ／に中つかさのめのとさふらひておと、のおほしよろこひて／とくきこえさせよとのたまはせつるよしほのめかしいて／たるに中納言むねうちつふれて浅ましときくに御かほの／さとあかみたるをはつかしとおほしたるなめりと心えて／さはいへとわか御さまやとをかしうつくしう見奉る／女君もいとわひしくあせもなみたもひとつにて引かつき／ふし給へるを中納言も例のやうにそひふし給へれとなに／事をかはきこえ給はんよつかぬ身のうつしさまにてなか／らふるをかりそめにしつ心なく思ひながらその事となき／かきりはた、母うへの人におされぬおほあなつらはしなから／さめるを見すて奉りてはいかなるやみにかまとひ給はんと／のみふようのものとおほしすてすひと日も御らんせられ／ぬをはいとおほつかなきものにおほしたるなとをさま／そむきすて奉りてもいと、つみ浅からすこそあらめと／さすかにすか／しくも思ひた、す有ければつひにをこ／かましきこともいてきぬる我身の心のうちこそ人に／似す心うけれおほかたの世のおほえは近つくやうもあらぬ／身をよにとりてはしれかましう見思ふ人あらんいみしき／事なりしかくてありなからいまたふるされさりけるさまなど／をあやしと思ひあやむる人もあらんたとさま／にいと／うき身のはつかしさなりやか、る身にてはいくよもある／ましきほとひとりあらんと思ひしをくやしうくも／あるかなと露まとろます思ひあかさる、に猶世中に／跡とめんかたもおほえす誰ならんか、る事のありけるを／猶何心もなくいていりましらひつるをいかにをこかまし／とうち守る人もあるらんとつく／と思ひあかして／かたみにとみにもおきあからすそむき／にておきいて／給ふとて女君を

ひきおとろかすにいよ／＼引かつきまさり／給へはいとたへかたきわさかな月比もあやしくゆるされぬ／御けしきと見侍りなからくもりなきみつからの心のまゝに／なにも心なく御らんせられつるをよつかぬ身のありさまを／いかにおほしなるそなといとほしうこそなけれ侍る／に心もしらす殿のひとへにおほしとかめさせ給はんこそ／いとくるしけれいさやこれよりすきたるらんこゝろさしの／ゆくゑもしり侍らざりけりや人にはたゝわくるかた／なく御あたりはなれぬはかりをたくひなき事に思ひ侍り／けるしれ／＼しさをみつからこそくやくしくはつかしくも／かへす／＼思ひ給へらるれといとのとやかにいみしうはつかし／けにてしのひかたきふし／＼はかりをうちほのめかして／我心のうちにもいつくをうらみ所にかはと心なからも／おかしうおほゆるにいとしも心うこくほとん心やましきは／なきなるへしとえもいはすにほひやかにうちほゝゑみて／女君のふし給へるを見るにいとゝしきこゝちは泣しつみ／給へるもこしらふへきことのはもおほえねは御まへに／人さふらへやといひおきて御てうつめしておこなひ／給ふにも我心のうちはいたく心うこきあなちにものを／くるしう思ふへきゆゑもなき人はをこかましともよつ／かすともさま／＼目をたて、思ふらんこそいみしうはつ／かしけれなそやすへてつひになからふるおこたりに／かゝるたかひめはいてきぬるそなといと、思ひとちめつる／心地して経をつく／＼とよみ居給へる何となくもの思は／しき御心のすむにまかせてくせいしんによかいとうち／あけていみしうたふとくよみ給ふなるをきゝふし給へる／女君の御こゝちたへかたう悲しくおもてのおき所なく歎き／みたれ給ふをも人はいかてかしらん

(34丁ウゝ37丁オ)

〔頭注〕

○うちほゝゑみて／中納言のゑみ給ふ也

【三二】

めつらしうれしき／ことをよろこひ給ひて大殿にもいつしかとほのめかし／きかせ奉り給へるを殿はいとあやしう
浅ましき事かな／中納言いまはさるかたに世にならひなくましらひたちたれば／よつかぬ身をするとてもさのみ思
ひなけくへきならぬを／よと、もにいみしくもの思はしけなるけしきなるもかやうに／したにあやしき事の有けるみ
たれにやとき、おとろかれ／給へといかなることそと問ひきこえ給はんも今はいとはつ／かしけなるさまをやといひ
なからは、かられてえきこえて／給はす
(37丁オウウ)

【三三】

人き、は例さまにき、はやし給ひかほなるを中納言／は殿のおほすらんこと中／かたはらいたくおほえていてまし
／らふも我にはをこかましともあやしとも目をかけて見る／人あらんかしとおほすにいと、人をは雲井にものとはく
／もてなし世をかりそめに思ひなすかほをいまはもてあら／はして月比は女君をもさるかたに浅からすちきりかはし
て／おきふしもなつかしうひとつ心にてよつかぬ我身に／たくひ給ふへかりけるちきりも心くるしうよのつねのま
ひ／なとありときかれ奉らすもかなとうちの御とのゐなとに／たちとまれるよな／もいかにおほすらんなど思ひ
は、かられ／ふかく哀と思ひきこえしをか、る事の後はいやしきも／有けるかなとおほししらるらんと思ふに又はつ
かしくも／あいなくも心のうちはへたゝるこゝちしてむけにさのみ／うらなからんもをこかましかるへければいとあ
りしやうにも／むつひ給はぬを女君はことばりにいはんかたなくはつかしう／悲しとおほし入てうちとけてもさらに
見あはせ給ふ／時なく中のうとくもといふやうに成ゆく御けしきをさは／いへとまことのちきりこそ心にいるらめと

のみこゝろうるに／あなちちにうらみなくさむへきやうもなければけしきも／あらぬさまにひきうけ思ひすましたる
さま深く成まさり／ておはする折もこのからにたゝおこなひにのみ心をいれて／あかし暮し給ふ大殿うちの御とのゐ
かちになりたるを／めつらしきことそひては今すこし心さしそひなんと／思ひしをいとあやしと人々も見奉る右のお
と、もうへも／あやしく中納言のさうしかちに夜かれにこのころ成給へる／かな
(37丁ウ～38丁ウ+41丁オ～ウ)
〔錯簡〕 後続本文↓41丁オ「このころ成給へる／かな」いかなる事にか……」

〔二七〕〔錯簡部〕

わらはれてしほれすかたは今のみや御らんするといたく／みたれぬほとけしきにてあるかなかへりいて給ふたくれ
の／たとくしき霞の間よりにほひこほれたる桜の花も／にほひおさるゝまてめてたきをつくく／と見おくりてかゝ
る／人に朝ゆふめなれてわれをは何とかは思はんつきせすつらき／ことはりかなと思ひつゝくるにいと、思ひやるか
たなくなみた／こほれて露まとろまでのみ夜を明し給ふ
(38丁ウ)

〔二八〕〔錯簡部〕

かくのみなけき／いられ人目もえは、かりあふましくせめわひたまふに／左衛門いと心よはくかたらひなひかされて
中納言例のうちの／御とのゐなる折く／夢のやうにみちひき入れ奉るを女君は／たひことに涙にまつはれて露にても
人にけしきき、／つけられていかでなからふへき身そとおほしいりながら／もほのかなるゆきあひのをりく／うつし
心もなきまで泣／まとひいらるゝさまなまめかしう哀けなるもたひかさなれは／見しられ給はすもあらず中納言のい

とめてたくすくれ／なからよそ／にて人目はかりなさけあるさまにのとやかに／さまよきめ^⑧うつしにはかういとい
みしくしぬはかり思ひ／いらるゝ人を心さしあるにこそと思ひなからけしきにても／人のもりきゝたらん時とおそろ
しうそらはつかしきに／人しれぬ哀のみしられすしもあらずなりにけるも／われなからいというと思ひしらる

(38丁ウ～39丁ウ)

「二九」〈錯簡部〉

かくのみものをのみ思ひ／はれ／しからて明しくらすにことにおほしもわかぬに／三四月にもなりぬれはみな人見
奉り知りて父おとゝ／も此月ころさしてそこはかとなきおほんこゝちのかく／のみ例ならぬはもしあるやうあるにや
とたつねあない／し給ふにもたしかならぬかきりはさもきこえさりつるを／御ゆなとまゐる人々見奉りてさにおはし
けりときこゆれ／はいといみしくおほしてゑみひろこりて今まで御いのり／なともせさりける事とさはき給ひて中納
言の心さしなどの／よこめ^⑧もせずねんころなるさまにさはかりの人さまにては／のこるくまなくてすきありかんもい
かにかむへきそいさゝか／のまよひなくまめやかなるさまの有かたく世のためし／にも引いてつへきそかしまして
此人のかほつきに似たる／人さへさしいてなは我家のひかりにこそはあらめと泪／くみつゝいひつゝけ給ひていみし
くゑみてわたり給ひて／帳のまへに給へるにいとくるしくてね給へるに殿の御けはひ／の近くすれはおきあかり給
へるにいみしくうれしとおほ／したるさまにてより給ひていかにそ例ならぬ御心地を／今まできかさりける事御いの
りなともせさすへき事と／なきに泣給ふをあやしかやうにはつねにこゝちなやましく／のみおほゆるをあやしかりけ
る事の後は何なけし／心ほそくのみおほゆるをまことにさる事もあらは中納言／いかにおほさんおなしさまにて

見え奉らん事のいみし／さをおほす心まとひにあせになりておはすれはあいなの／御ものはちやとていみしくうれしとおほしたるさまぞ／かきりなきや帰給ひてもさま／のくた物なにやかやと／おほしいたらぬくまなくあつかひきこえ給ひてうへに／とくわたりて見給へときこえ給へはつかしうもおほすらん／あまりけせうになきこえ給ひそとのたまへはいてやそこには／大将と女御の御かた／をこそ思ひきこえ給へれ此御かたに／おろかなるなめりかくしるくなるまでしらぬ人やはある／とし比思ひきこえし^本はいありて我むねをあげ給ふ／へきことゝて御めのと共めしかならずしもえ見しり／給はしけふよき日なりよさりおはしたらんにほのめかし／きこえ給へなどのたまふほとに中納言おはしたりさるや／夜をたにふかし給はぬさまの此人の御心おろかにあは／しからましかはいかにむねいたからまし女は后に／なりても何にかはせん此人にもちひられたらんのみこそ／めてたかるへき事なれかしこく

(34丁ウ + 39丁ウ + 41丁オ)

〔頭注〕

○三四月／懷妊也

「大将」——○此大将は四の君の御兄也

〈錯簡〉 後続本文↓【二九】(34丁ウへ)

【三二】(錯簡オワリ)

いかなる事にかあるらんと／なけき給ふを見き、給ふ御こ、ち置所なくわひしう／いかてきえうせ身をなきになしてしかなとのみおほし／なるをかの人は左衛門浅からす心をよせたる道のしるへ／なれはこ、ちの有さまなとくはしく^地

きくにいと、／哀にちきりのほと思ひしられてさはれ世のつ、まし／き人目の見くるしさもしらすぬすみかくしてしかな／といられまさり給へとさはた有へき事ならねは思ひ／みたる、事おほかるよにそありける

(37丁ウ～38丁ウ+41丁オ～ウ)

【三三】

中納言の君は宰相／のいとありしやうにはあらずいみしくものをおもひ／いたるけしきもとより此女君に心さし深しとき、／しに此人はかりこそあらめさはいへとこと人はえふと／思ひよらしをさらはこと人よりもうちまもりしたに／思はん事のはつかしうもねたくもあるへきかなと思ひ／よれとさしてさはしりかたき事なりかしなそやいきうき／世の中にせめてなからふへきをやの御思ひなとを／ふかくたとるほとにかゝる事も出来ぬるそかしなと／ちゝに思ひあくかれて見えぬ山路たつねまほしき／御心そやう／／いてきにける

(41丁ウ～42丁オ)

【三四】

その比よし野山に宮と／きこゆる人おはしけりせんていの三のみこにておはし／ますなるよろつの事すくれておくれたる事なく／世の人の師とする事かた／／のさえおんみやうてんもん／夢ときさう人なといふ事までみちきはめたるさえとも／なりける此世にあまりすきてかしこくものし給ふとそ／むかしはるかくさうとて十二年に一度もろこしにさるへき／人わたしつかはしてかの国のさえをならはされけり／すゑの代となるまゝ、に人のようめこんしやういと、／わろくなりゆくによりたうにわたる人絶にたるを／われもいたらんとせちに申こひてわたり給ひにければ／その国

にもまちうけて日本の人あまたわたりきぬ／わか国にもかしこき人おほかれと道／のさえにはかり／かしこき人なかりきとおとろきあふきてその国の一の／大臣ならひなくいつきかしつきけるひとりむすめにむこに／とりて思ひいたつきけるほどに程なくうちしきり女／二人をうみ置いてその母なくなりけりあらぬ世の人／なるとてもものとはくみつかぬこ、ちもせずこの国は／しらすにほんにておのつから女御后みかとの御むすめを／はしめて見しにかはかりのかたちさましたる女の／たくひなかりきと深く心をと、めてたち帰る御心／も思ひ絶にけるに悲しいみしきはよのつねなり／やかてその国のうちにてはいをもとけ身をもすてんと／おほしけれとかたみにとまり給へる姫君にひきわかれん／事も悲しくおほしわつらひてしほとにその大臣も／つひにやまひつき命たへすしてなくなりければいと、／たつきなくさへなりてありめくるへくもおほされぬに／その時の大臣公卿またむこにとらんとときこえけるを／又人を見るへきこ、ちし給はさりければかけてもき、／いれ給はさりければねたきこ、ろともいてきてころさんと／さへかまふるけしきをき、給ひてをしからぬ命とは／いひなからしらぬ国に我身をはふらかしてん事は／いと悲しくわれをまたなく思ひあかめいみしく心に／つく人のある時こそふるく見しよもわする、心もあり／けれありにく、おそろしく帰りなまほしくおほし／なりて此女君たちを見すてんもいみしく悲しきに／もろこしの海に何州といひけるは女かよはぬ道ときけ／といか、はせん船とむる海竜王もあらはやかてわれも／たひの空にいのちをすてんもをしからすとひたふるに／おほしたちてなくなりにし大臣の子ともにかたらひて／にくるやうにてかへりおほしけるにあしきりう王もいかに／心かはりたる世にか船のよとむ時なく思ふかたの風／こと更におくるやうにて帰りつき給ひにけれと世のためし／にもいひなかせしたうの女のはらに子とも有ける／などいはれしとおほしければ此姫君たちをいみしく／かくしてゐてのほり給ひてあらぬよのさかひになりて／しもけふりとなり給ひし雲井さへはるかにへたゝり

／悲しき事をおほしほれてうち忍ひ比君たちを／かきなてつ、又人をけちかく此世に見るへきものとも／おほされす
うちたへはて、なくくすこし給ひけり／いか、しけん此みこなんおほやけの御ためにうしろやす／からぬ心そひて
我こそ国のわうならんも道理なれと／おほしよりたるといふ事いてきてはるかなる山のさかひ／にもはなちつかはさ
れぬへきを夢のやうにき、まとひ／すへて我此世に例のかたちにてあるおこたりなり／心はかりはあらぬ世に住はて
なからむけにつきなく／猶君たちの御あつかひをしましりゐたらん事の／つきなさにいかにもわかよと物おもひし
り給ふまでと／思ひすくしけるいとくやしきこと、おほしたちて／にはかに御くしおろし給ひてよし野山のふもとに
／おもしろき御や有けるに此君たち引くしつつとも／なく人に見えしられて入給ひにしより後鳥の音にたに／なつ
かしくき、なれしは音つる、人なきよしの山の峯／の雪にうつもれてすくし給ふ

(42丁オ～45丁オ)

【頭注】

「見えぬ山路」―引哥／○世のうきめ見へぬ山路へいらんには思ふ人こそほたしなりけれ

【三五】

姫君たちの御かたち／有さまの哀にあたらしくはかなくかきならし給ふ／琴のねもから国のほんたひおほえて人にす
くれ／給へるをあはれに悲しく見奉り給ひて今は我身／はかりこれよりふかく跡絶なまほしきにまた知る人／なくい
みしき御有さまともにひたすらうきよをえこそ／ゆきはなれ給はぬほといと所せけれとさりともおのつから／いさ、
かも人めきいて給ふ道のしるへはかならすいてき／なんと心にふかくおほしさととりてちきりさためたる人を／待んや
うにおほしける

(45丁オ)

【二六】

中納言はいと、いかて世にあらし／とおほしなる事まさりて花紅葉につけても四方の／山辺にましろゐて人にゆくゑ
 しられてはひこもるへか／らん谷のかくれ戸峯のほそ道さすかに思ひをそへつへき／所ありやとおほしまはすに吉の
 山の宮の御うへを／くはしくかたり出る人ありてその御すみかなんむけに／世すてはなれたるひしりの御すみかとは
 見えなから／水の流れ岩のたゝすまひも都にはすへてめなれぬ／さまにても思ひもなくさめかつは心ゆきぬへき御
 ／すまひなりとかたり出たるをさる人もし給ふとは／みなき、置給へれば世をそむかんにもむけに山ふしなと／の
 あたりにたちよりてその人のてしに成てあらんはさす／かにもおそろしくわひしかるへきを御心はへも有さまも／
 なへてにはものし給はしかしと今まで我おもひ／よらさりけるよとおほして此かたる人をめして何の／ゆかりにした
 しくは知りたるそとて問はせ給ふをちに／侍る人かの宮の御てしにてよるひる御あたりもはなれて／ほとけにとりわ
 き思ひ給ふるやうありてさふらふにさる／へき時きあひとふらひまかり侍ると申すいとうれしき／ことかな我その宮
 をとし比いかてしり奉りてまゐり／かよひて世に絶たるきん^平ならひ奉りまた見およはぬ／ふみの所／き、あらはさ
 んと思ひなからさはかりすみ／はなれたる所ある御心によもうけひき給はしとおもひ／は、かりてくちをししく思ひす
 くすを御けしき給はらせ／よろしくおほしめされはいみしくみそかにまゐらんと／いとねんころなるけしき^宮にてかた
 らひ給ふいとさは／やすき事にさふらふなりと申せはさらは此ころの／ほとにまゐれとのたまへはいにけり

(45丁オ～46丁ウ)

【三七】

をちの僧にしか／＼殿の権中納言との、かう／＼申させ給ふとくは／＼しくきこゆれはさき／＼さるへき人まゐり給ひ御せう／＼そことも申させ給ふもありしかとすへてまた世にあり／＼けりと人にもき、つけられしとてさらになんきこしめし／＼いれぬものとなりたれば此四五年は音つれきこえ／＼給ふ人もなかめるをいかなるへきことにかはいかにも御けしき／＼給はりてきこえんとてしはしと、めてかう／＼なんわさと／＼なにかしかをひなる人をつかひにて給はせたと申せは／＼とはかりうちおほしめくらしてさはかりゑいようにまと／＼はれてめてたきてふは^花なの事のみこそ心にいらめ／＼いかにき、給ひてかふかき山までおほしいるらんそれも／＼さるへきえんにもものし給ふ人にこそあらめいとうれしく／＼なたちよらせ給へといと御心にいりたるけしきにて／＼すか／＼しくうけひき給ふをいとあやしけれとおほし／＼うる所あるにこそあるへきとこ、ろえていとかたき事と／＼いとほしくかひなくて帰り給はん事を思ひつるにかう／＼／＼なんのたまはするとかたれはよろこひなからかへりまゐりて／＼くはしくきこゆかつ／＼思ひかなひぬるこ、ちしてうれ／＼しき事かきりなしあなかしこかくなんと人にきかすなと／＼口かため給ふ

(46丁ウ～47丁ウ)

【三八】

此たひあまり世をそむきなん事あへなかるへし／＼とおほしなん又よかなりとうけひき給はした、人の／＼御有さまを見奉りて此世ならすたのみ申よしをちきり／＼きこえて此たひは立帰りなんとおほせは夢いみしく／＼さはかしく見ゆるとつくる人あれはきよきわさせさせに／＼七八日はかり山寺になん有へきそことしられぬれはこ、ろ／＼あはた、しく人々來なとしておこなひもまきる、こ、ち^地／＼すなといひまきらはし給ひて出たち給ふとても女君とは／＼二三日ともへた、

るへきほとはおほつかなかるへきことを哀に／なつかしくうちかたらひさるかたに浅からぬ御中と見えしを／此事の後ほかの御心のうちの人目もをこかまし／ければさしもあらす成にたるを女君はいとはつかしく／悲しきものからかゝるにつけてもあなかななる人の／ちきり浅からぬ哀はこよなく身にしみたるもわれ／なからいと心うし中納言もさこそおほすらめとおし／はかるもそれをうらむへきゆゑある身かとは思ひはなれ／よろつを見き、しりかほならぬそねたけなりける

(47丁ウ 48丁オ)

【三九】

御とも／にはしるへせし人はかりさては御めのと子やうの人したしく／おほす四五人はかりいみしくしのひてまうて給ふ九月／はかりなれはむら／けしきはみゆく山のけしきも／哀なるにまた見もしらす遠くわけ入給ふまゝ、に心／ほそくあはれに殿うへなに事かおはしますらんとおほ／つかなくかりそめとおもふ道たにかうこそおほゆれまして／いまはと思ひたらん程と人わろくおほししらる／

中納言

涙しもさきにたつこそあやしけれそむくたひにもあらぬ山路を

道よりしるへの人さきたて、奉り給へは御しつらひかき／はらひつくるひて御そ奉りかへなんとして待きこえ給ふ／日やう／うちいるきはにそおはしたるよし御せうそこ／きこゆるもいたくよういして入おはしたりふせんれうの／所／秋の草をつくしてぬひたるさしぬきに尾花色の／さうかむのあをにくれなるのうちたるぬきかけて光を／はなちてはな／とめてたくた、今こくらくのむかへありて／くものこしよせたりとも猶と、まりて見まほしき御あり／さまなり何事もみな口をしくあせゆく世のすゑ／なれとかゝる人のものし給ひけるよとおとろかれて／とはかりまも

り給ふにいと、もてしつめてさふらひ／給ふみこの御有さまもいと清けにおはしける人の／おこなひにやつれ給へる
さま色白くかしらいと青やか／にあてにやはらかにて思ひやりきこえつるほとよりはわかく／きよけにおはします

(48丁オ～49丁オ)

【四〇】

御ものかたりやう／うちとけゆく／まゝにさえのほとと此世にあまりてこと／にすくれ／たりける人かないか
てか、らんとめつらかにおほす姫君たち／の人めき出給はんしるへなりと御心のうちにさとりおほせは／いとなつか
しくうちとけ給ひてむかしよりの事とも／をみなもろこしにわたり給ひてありしさま悲しいみ／しきめを見てよに
なき女二人をは見すてす例なき／やうなる事のおとき、かしこく身にそへてうかりし世の／みたれにもひきかゝり猶
此人／を道のほたしにて／これより深くも身をえかくさぬよしをいひつゝ、け給へるも／あまりすくしてひしりたち
ても見えすあてやかにあはれ／けにうちおほしのとむるけしき見る人も涙と、めかたき／に我もなく／さてももの
し給ひかたく今の人目は／人よりけに心ほそくもくちをしくもあるへきにも侍らねと／いはけなきよりあやしくよに
たかひ人に似ぬ有さまにて／やう／もの思ひしらるゝまゝに世にありにくゝ思ひなる／さまをきこえ給へはみなさ
見え給ふ所あれはうち泣／給ひてしか涙をと、めてひしりはのたまふやう御心ならず／おほすへき事なれとそれしは
しの事なりいかなるにも／此世の事ならすさきの世の物のむくひなれはともかくも／人のおほすへき此世に世をなけ
き人をうらむるなん／いと心をさなくさとりなき事に侍るへき更におほしいとふ／へき御事にも侍らすつひには思ひ
のことかみをきはめ／給ふへきちきりいとたかくものし給はめくはしくきこえ／させすともおのつかからさいひきかせ

しとおほしあはする／やうもあらむうたてさう人めかしくきこえつ、けしと／のたまふをいかに見給ふにかあらんにはかによつかぬ身を／何ゆへにか身をきはむきにかとおほす女君たちの御／事はか／しき身には侍らすとも世にめくらひあらん／かきりはうしろみ奉りてんさらにその御事うしろめたく／なおほしめしそときこえ給へはむかしよりさらに人に／かゝる事ありときかせ侍らぬをさるへきにやあやしき／とはすかたりをきこえ出づるもよのつねの事などと思ひかく／へきならすかうなからも女のみすてつれと捨られすそむ／かれぬものにてあひとふらひ給ふ人なくては侍るましき／わさとはかりを所せく思ひ侍れと人のちきりすくせ^世みな／侍るわさなれはさらに此山に世をつくせなともゆいこん／すへしとも思ひ給へす思ひおきて侍れとすくせ^世といふ／もの侍れはそれにもかなひ侍らし人き、おとろ／し／からすおもりかに身をもちひよとも思ひ給へす只すく／せ^世に任せてもなんその程のいまたはるけさにやといと心／くるしきかうるさく思ひ給ふるなとうち泣つ、つくす／へうもあらぬ御物かたりにもあけぬめてたくなつかしき／御あたりに御ものかたりとでもろこしから国までおほつか／なくと、こほる所なくちこくのそこさう^{浄土}とのおくまで／くもりなきこゝちするによりつつ心ゆき身のなけきをも／さましてかつは哀に悲しき事おほくいみしきにたち／帰るへき心地もせず此世にまたもてつたへさりける／ふみともひろけて見せ給ふに此中納言の御さえさとの／たへなる事もろこしにもならふ人なしと思ひたりし／われにもおとるましかりけりめつらかなる人かなと／おほしおとろかるたい出してふみつくらせ給ふに／おもしろく悲しき事もろこしよりもて傳へたるふみ／ともにまさりてつくり出かきいて給へり手のさま筆の／き、めつらかにいみしき人をも見るかなやんことなき人に／こそあはれとおほしおとろきてうちうなつき給ふふし／／あれはめつらしう見給ふ

(49丁オ～51丁ウ)

〔頭注〕

○さえのほとと此世にあまりて／よし野の宮の御心中納言の才を感じ給ふ也

【四一】

はかなくて二三日つきぬ／宮は此人の御ありさまさえのかきりなきにめて、おこ／なひもけたいし給へりきんの御こと
とをいとゆかしけに／おほしたれは深き夜のすめる月にかきならし給へる／もの悲しくおもしろき事たくひなしすこ
しはかり／にてさしおき給へれはとりてひき給へるさらにおなし／しらへをふとき、とりていとおもしろきまで残り
のねは／きこえさせつるほたしものはかなき人にをしへ置侍り／しにたかはすひきとりたりとおほえ侍る山ふしの
よしの／の峯の山おろしに耳ならして侍るひか耳にやされと／わさとたつねさせ給へるよろこひにはうとう思ひきこ
ゆへき／にも侍らすとて姫君の御かたにわたり給ひてかゝる人／たつねものし給ひて日ころものし給へるをこなたに
て／ものなときこえ給へなへての人のやうには見えぬ御有さま／なりゆくりに人目あやしかるへけれとうしろめた
うは／見えさめりとてさるへきさまに引つくるひてあかつき／ちかく出る月のきりわたり哀なるに御せうそこあれは
／えもいはすにほひみちてまはゆきさまにておはし／たれははしちかくなかめ給へる姫君たちいとはつかしくて／引
いり給ふをたゝきこえんまゝにかはかりよつかぬ御すまひ／には何かはよのつねにもてなし給はんもたかへりうしろ
／めたくは有ましきをとこしらへおきて我御身はあなた／におはしぬ

(51丁ウー52丁ウ)

【四二】

此御かたはすこしおくに引いりてちひさやかなる／しん殿のいとことさらにことそきたるしも見所ありこゝろ／と、
めてもてあそひ給へる人の御すみかと思ふうちとしめ／／と人けもせず水にうつれる月はかりそさやかなる／か、
る所にいつとなくつく／／となかめ給ふ女君たちの御心の／うちいかなんといみしう心くるしく思ひやらるゝにこ
のよ／ちかきかたはから国のこゝちものすく／／しう深きものゝ、／哀などはしられ給はすやあらんなどおしはかるも
ゆかし／きに人こゑもせねは／

中納言

よしの山うきよそむきにこしかともことゝひかくる音たにもせず

わりなのわさやとなかめいてゝうち泣給へるけしきいみしう／なつかしう哀なるを都の人たにたくひなく思へる中の
／おもひにもゆる人おほかるにまいてなへての人たに見ならひ／給はぬ御こゝちとも浅ましきまておほさるゝに御い
らへなど／おもなくきこえいつへき人もなければいとつかしう／わりなけれと久しうなるもかたはらいたくてあね
宮少し／いさりよりて／

姫君

絶すふく峯の松風われならていかにといはん人かけもなし

ほのかなるけはひいみしくあてに心はつかしくよしあり／心にくきほと都にもかばかりのけはひは有かたうおほ／ゆ
るにいつれならんと思ふもいとゝ心もとなければ／

中納言

おほかたに松のすゑふく風の音をいかにとふもしつ心なし

よのつねのけさうひてはあらねとたゝ哀に心ふかしもとより／われも深くたつねいるよしをいみしくなつかしけにい
ひ／なし給ふにすこしおもなれゆくにやをり／／浅からすさし／いらへ給へるいみしくをかしき人のけはひ心はへわ

れ／にてはかひなくもあるかな宮の宰相はかゝる人世にもの／し給ふともいまたきゝつけぬにやあらんいかにきゝま
とひ／心をつくさんとまつ思ひ出られて我身もなつかしく／うちゑまれ月はくまなくきりわたりたるに虫のこゑ
／／みたりかはしく水の流れ風のおと鹿の音など／ひとつにきこえて哀をそへて涙をもよほすつまとなる／所のさ
ま人の御有さまなり
(52丁ウゝ54丁オ)

【四三】

かゝるみすのといまたならひ／侍らぬ事にてはしたなくおそろしくこそ思ふ給へら／るれなとうとませ給ひそとてや
をらすへり入給ひぬ浅／ましくあきれまとひ給ひてうつふし／給へるを／あか君かくなうとませ給ひそなれ／し
き有さまは／よに御らんせられ侍らしかたしけなきことなれとあやし／なから今ひとりたくひあるとおほせといとの
とやかに／なつかしくこしらへなくさむれと夢のやうに思ひさはき／給へるいとことほりなるに中の君も身にそへて
ゐさり出／給へりければうちそひ給へるなるへしさふらふ人／／などこはいかにとあはたゝしく見るもあるへかめ
れといつ／となくかゝる御すまひを心ほそきことゝ思ひなけく心とも／なれはかうめつらしくめてたき人のおはする
ときゝて心／ときめきしおの／のすかたともうちなえはみたるに／かゝやかしく入ぬるそたのもしけなきやこはい
かにとてより／くる人なきよとわりなきに人のもてなしもあやにくに／いまめかしくなともあらすたゝなつかしけな
るにわれ／のみ思ひさはかんもあまりなるに心をのへてあね宮へたて／なしとはかゝるをのみや人の思はん所も浅ま
しと／あはめ給へとそはたゝおのつから心やすくおほしなせ世の／中にめくらひ侍らんかきりはいかて心さしのかき
りを／つくして御らんせられにしかなと思ひ給ふるにはあまり／おほつかなくへたて多かるこゝちしていふせく侍り

ければ／たゝうらなく我も人もうとかるましきよしを思ひ給へ／よりてなんなときこえ給ふにやう／／なくさめても
のし／給ふ中の君いとわりなくて引かつきてうつもれ入給ふを／けに心くるしくて几帳さしかくしていれつ心うくも
／へたてさせ給ひぬるかないつれをもおなしこと、こそ／思ひきこえさすれとうらむるにうちつゝき給ひぬへき／け^(気)
しきなればよのつねめかしく引と、めて只うち／そひふして此世ならすちきりかたらひふし給ふさま／の露はかりう
とむへきやうもなきをいかてか見しり給は／ぬ人のあらんたゝいとわりなくはつかしうかうやうなる人の／ありさま
を見しり給はぬにあやしうもうしろめたうも／おほゆあけゆくにいとゝわりなくはしたなしとおほえ／たり白きひと
へかさねはかりなよゝかなる御すかたいとも／ほそやかにものよりめかけいてたるさましてかしらつき／かみのかゝ
りなへてならすうちやられたるほとうちき／にもいとおほくあまれるなるへしゆゑふかくもて／まきはし給へるそ
はめいとくまなく白くうつくし／けにていはんかたなくけたかくきよらにもものし給ひけり／もろこしの人めかしくけ
とほく人に似ぬ所やなど／ゆかしさにかはかりみたれつるをいとあてに見まほしき／御有さまかなと哀にめてたくい
よ／／心のかきりたのめ／ちきり給ふをとこの御さまはたさならいみしくめて／たきあさけの御すかたをかたみに
いとめてたしと見給ふ／にもあかくなりゆけは出給ひぬ
(54丁オ―56丁オ)

【頭注】

○今ひとりたぐひあると／我をも兄弟とおぼせと也

【四四】

をかしかりける人のさま／かなと思ひ出られて御ふみきこえ給ふ／

中納言

いまの間もおほつかなきを立かへりをりても見はやしら菊の花

とよのつねめきたるをむけにさやうにとりなしけしきはむ／を姫君はいいなく人のけはひのなつかしく哀なりつる／
にそこはかとなくうちかたらはれつるをいまそいかなり／つる事そと浅ましくはつかしきにこゝちさへたかひて／お
ほえ給へは御返りもきこえ給はぬを人ゝいみしく／かたはらいたかりきこゆれとかならずさしもきこゆへきこと／か
はとてやみ給ひぬ暮ぬれば例のそなたにわたりて／月を見つゝ、うちかたらひことの音もかきあはせつゝ、明すに／心い
りはてゝ立帰るへきこゝちもせず
(56丁オウウ)

【四五】

はかなくて日ころ／おほく過ゆくにかくへたてなきさまにとき、給へといか／なる事そなともおほしおとろかすいと
よううちかたらひ／ておはせとのみきこえ給へはいと、いかてかへたてもあらん／さりとして身をはかへぬものからか
くて有へきならず殿／うへいかにおほつかなくおほしなけくらん右のおとゝも／いみしうらみなけかるらんかしみ
つからの御心ひとつ／こそさしもおほさるめとさま／思ひやらるゝ事／おほかるにさのみも絶こもり給はて出給
ふとて宮にも／あさの御ころもほうふく御とのるものとまことに峯の／松風おとにのみき、給ふはかりあららかに
て奉り給ふ／かみしもさふらふ人ゝ姫君たちの御れうれなるの／かいねりにおり物のうちきなとよになき色あひに
して／さらぬきぬあやなといふもの多く奉り給ふ御扇など／なへてならぬさまなるを更にあまりこちたくかゝる事／
は思ひ給へすてゝ、しものをほいなき事になんなどのた／まへと人からのいとあてに心はつかしけなるに心のまゝにも
／かへさまにくゝてほたしにかゝつらひ侍る人ゝのうへは／たのみきこえて心やすくなんこれよりふかくし給へいり

なん／とするよしをうちかたらひてのたまふ中納言も更なることは／きこえせんかたなく、る御すまひもうつろはしきこえ／侍らんとなん思ひ給ふるときこえ給へはそはた、いましか／ゆくりなからんとは御ためも人き、ひんなく侍りなんか／なからもおほしすつましきさまにたに思ひ侍らはうしろ／めたき思ひなくさみ侍りぬへくなどちきりかはして／御おくりものにもろこしよりもてわたり給へるよになく／此世につたはらぬくすりともあるかきり奉り給ふ／姫君には立かへりかきりなき心さしをちきりおきても／あかすあはれなれば／

中納言

しつ心あらしに身をそくたかましき、ならひぬるみねの松風

女君も目もあやになつかしうあはれけなる御有さまを／見さらんは今すこしさう／しきさまさりぬへくおほえて／
年を経てき、ならひつる松風に心をさへそそへてふくへき

我ならさらん人に見せきかせまほしうめてたき御有さま／けはひなるもあかぬ心地してかへり給ふ

(56丁ウ～58丁オ)

【四六】

野山のけしき／やう／色ふかくなりけりはかなく日比にもなりにける／なと哀にてまつ殿へまあり給へれば猶二三日かと／こそ思ひしを日比見え給はさりつれば心をまとはして／おもはぬ山なくいつくにもしの給へるそよはなれて／人にしられてありき給ふは猶いとかる／しき事を／とて日比はものをもさ／まゐらさりけるをいまそ／御まへに物まゐらせ給ふつゐてにもろともにきこしめす／よつかぬ御有さまをいまはさるへきなりけりとか、るさまに／つけてもめてたくすくれて世にましらひつき給へは／おほしなくさみはてつるにうれしくいみしとおほし／たる御け

しきいとあはれなり見れとも／＼はなやかに／あくよなくめつらしくうつくしけなるをうちゑみて／つきせすまほり
給ひて右の大殿も日比思ひなきて／心くるしきことのそひてしも心とまらぬやうになりゆく／こそなけれけな
とてさはた見ゆる人めはめやすく／もてなしてこそなとをしへのたまはせてそ、のかし給ふ／ものから世にあらんほ
とは猶朝ゆふのへたてなく見え／給へとて涙くみ給ふ
(58丁オ～59丁オ)

【四七】

右の大殿には四五日といひおき／給ひし十よ日におよふまでおともせずさきこもり／給へりつるをおほつかなくあや
しきことに思ひなけき／おと、は物もまゐらすおほしなけきたるを女君はわれ／ゆへかくのみのをおほすといとほ
しく悲しきにつねに／心ほそけにて世中にありはつましきさまの所思ひ給へる／人なれはいかにおほしなりにけるそ
といみしくよろつに／思ひみたれさはくをもしらす宮の宰相はこれを／よきひまとなく／こかれまとひ給ふ心よは
くみち／ひききこゆるよな／＼を心うしと思ふかたはかたとして／これこそはまことに深き心さしなめれと思ひしら
れ／ゆくあはれも浅からすうちなひき腹なといとふくら／かにうちなやみ思ひみたれたる人さまのかきりなくいみし
／きをしのひつ、ほのかに見る宰相の心まとひそこと／はりなるかたみに涙にまつはれつ、立わかれ給ふよな／＼
ものをのみおほしまさるに殿はいてやなとおほしのとむる／所なく御きよめをさへし女房つねよりもあさやかに／さ
うそきけさうせよとさへ立さはき姫君をもなと／かくてはふし給へるとせめておこしすゑてよろつに／つくろひすゑ
給ふもかたはらいたくるしきに入給ふ／おとすればもの、うしろにおと、は立かくれてのそき／給へは日比のほと
にかたちは今すこしにほひまさりに／けるこ、ちしてはな／＼とあいきやうはあまりあたりにも／こほる、やうにて

いとのとやかについゐて女君にさしより／てしはしと思ひ給へし山里見まほしきふみなとの侍り／けるをえ見さし侍らざりつるほとおほつかなしと尋ね／させ給ふやとこゝろみ侍りつるにすき侍るをり／もかひ／なく思ひわひて人わろくこそ立かへり侍りぬれと／きこえ給ふに御いらへせんかたなくていと、しくそはみて／かほをもてまきらはしていらへ給はさめればさもや／いと、おほしのみこそうとませ給ひにけれめつらしや／なとおほしなほるとこそ思ひ給へしかなしりめに／かけていたくもうらみこしらへてた、うちなかめいて／給へるそいみしく心やましき女君の御袖くちすその／つままであてになまめかしくたを／として御くし／のひまなくかゝりうちきのすそになかれゆきたるすゑ／つき絵にかくともよのつねなりやきはもなくうつくしけ／なるさま見てもあかぬ心地すすへきをさまよきほとに／いひなしていたくもなれやらぬを見たち給へるをやの／御こゝちといみしくうらめしうむねいたけれどさし／ならひ給へること人ならひたゝましよとそ人わろくみな／され給ふや女君うちふしてもなつかしう哀にうち／かたらひちきりつゝ、さるかたに浅からざりし御けしきの／引かへこよなくこまやかならす成にたるもいとことほりに／我身はつかしくつゝ、ましう又我心のうちもへたて／なくしもあらぬに中のうとくもといふやうにそむき／／になりぬるをさはいへとまことならぬちきりを／あさくおほしなるにこそはとことほりにうらみ所なき／に我身はつかしう思ひしられてかゝみのかけを／うらみてもおほとかにあてにおはせん女はたゝなつかしう／あはれなるよそのかたらひしもこそあはれなるへけれ／と我よりふかくおほしなひかるゝかたのあらんよと／思ふになまこゝろうけれとそのまゝにうらみいはんも／あいなければさはれかくと世をかりそめに思ひなす／にはうきもうからすとなん／

(59丁オ～61丁ウ)

後ろ遊紙…ナシ

大阪大学外国学図書館蔵「とりかへはやの物語」(第一冊) 翻刻・その1

(以上、第一冊)

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

——『權』・『春燈』・『岩伍覚え書』・『寒椿』を中心に——

水 溜 真由美

一 はじめに

日本近代文学史上、花柳界を描く小説は枚挙に暇がない。とはいえ、その圧倒的多数は男性作家の筆によるものである。その理由は、男性作家が客として遊廓や花街に日常的に出入りし、芸娼妓と深い関係になることが珍しくなかったのに対して、女性作家のほとんどは、それらの場所に足を踏み入れることさえなかったからである。もちろん、小説は虚構である以上、実体験がなければ書けないというものではない。たとえば、現代の作家が綿密な調査を行ったうえで、数百年以上前の出来事を素材として優れた歴史小説を書くことは可能である。

とはいえ、実体験が作品のリアリティを保証するという面がないわけではないし、そもそも知る術のない素材につ

いて書くことは難しい。芸娼妓でない女性が花柳界に接点を持つことは極めて困難であつたうえに、芸娼妓に対する根深い差別は彼女たちの体験を語られにくいものにしていた。他方で、芸娼妓を含む「遊女」*¹について語ることは今日に至っても強い政治性を孕んでいる。「遊女」稼業には様々な偏見がつきまとううえ、小説の素材として取り上げられがちな「遊女」と客との関係は（どこまでが「仕事」の範囲であるのか曖昧な場合も少なくない）、しばしば強制的な打算の同意なのか恋愛なのか多様な解釈が可能である。これらを考慮すると、「遊女」と親しく接しているからといって、男性作家が描く「遊女」の姿が、どれほど「遊女」の側の真実に根ざすものであるのかは疑わしい。

「遊女」を描く女性作家の作品は限られるが、男性作家と比べて女性作家は「遊女」をめぐる認識の限界に自覚的であつたように思える。そもそも遊廓や花街や私娼街を気軽に訪れることのできなかつた女性作家は、「遊女」を描く際、どのような視点から何を書くかについて注意深い選択を行わざるを得なかつた。

たとえば、岡本かの子「老妓抄」は、冒頭と末尾に「老妓」の和歌の手ほどきをする岡本の分身らしき人物が登場する額縁構造をとりながら、経済的に自立している年増芸妓の私生活を描いている。幸田文『流れる』*²は、幸田が芸妓置屋で女中を行つた体験に基づく作品であり、女中の視点から芸妓置屋の女将と芸妓たちの日常生活を描き出す。芝木好子『洲崎パラダイス』*³は、特飲街の入り口付近にある飲み屋を舞台にして、特飲街で働く女性（及びその予備軍）と客の姿を描く作品である。

これらの作品は、「素人」の女性がアクセス可能なプライベートな領域や周縁的な空間から「遊女」の世界にアプローチする。作中に作者の分身を登場させる設定は、「遊女」を描く視点に自覚的であろうとする身振りともし解釈できる。*³ところで、花柳界を描いた著名な女性作家の一人に宮尾登美子がいる。宮尾は一九二六年、高知市の芸妓娼妓紹介

業を営む家庭に生まれた。宮尾は『權』を始めとする多くの作品において家業の芸妓娼妓紹介業や花街を描いた。虚構性の強い『陽暉楼』を除いて、それらのほとんどは自伝的な作品である。

本稿では、宮尾の自伝的作品として、宮尾の養母をモデルとする喜和を視点人物とする『權』、宮尾自身をモデルとする綾子を視点人物とする『春燈』、宮尾の父をモデルとする岩伍の一人称小説である『岩伍覚え書』、幼少期に宮尾と一緒に生活した四人の「仕込みの子」（芸妓の見習い修行をする子）をモデルとして彼女らの人生をオムニバス的に描く『寒椿』に着目したい。芸妓娼妓紹介業を営む家庭で育った宮尾は、先ほど言及したどの女性作家とも比べものにならないほどに「遊女」の世界と深く関わった。とはいっても、宮尾にも宮尾の養母にも「遊女」稼業の経験はない。そのことを反映して、喜和と綾子を視点人物とする『權』と『春燈』は、物語の視点を「遊女」の世界の外側においている。しかも喜和は、ことある毎に「素人」の世界と「玄人」の世界の間に境界を見出そうとする。宮尾をモデルとする綾子と『寒椿』の悦子は、「遊女」としての人生を歩む四人の「仕込みの子」と自身の差異を強く意識している。^{*4}

こうした姿勢は、多くの女性作家が「遊女」を描く際に自身と「遊女」を区別する態度と似ているが、両者の間には差異も存在する。「遊女」の世界と限られた接点しか持たなかった多くの女性作家と違って、喜和や綾子（『寒椿』では悦子）は「遊女」の世界であるところの花街に生活基盤をおいている。喜和や綾子（悦子）が「遊女」との間に見出す境界は花街の内部にある「素人」と「玄人」の間の境界であり、その境界は階級格差を背景とする女性内部の分断に連動している。一方で、芸妓娼妓紹介業の主たる担い手である岩伍や息子の健太郎（綾子の異母兄）は、「玄人」の世界の内側に身をおいている。とはいえ当然ながら、「遊女」の性的サービスを客に買わせる立場にある「女術」と、

客に性的サービスを提供する立場にある「遊女」との間には、決定的な立場の相違が存在する。

本稿では以上のような観点をふまえながら、宮尾の自伝的小説において花街の中の境界がどのように描かれているのかを考察したい。またそのことを通じて、宮尾の自伝的小説を「遊女」を描く女性作家のユニークな試みの一つとして位置づけたい。

二 自伝的作品の概要——『懼』・『春燈』・『岩伍覚え書』・『寒椿』

先述のように、宮尾登美子は一九二六年に高知市の芸妓娼妓紹介業を営む家庭に生まれた。^{*6}宮尾は父の岸田猛吾とその愛人である女義太夫の芸人との間に生まれた子であり、宮尾の実母は宮尾を出産した後すぐに宮尾を猛吾とその妻である喜世に託して宮尾の許を離れた。宮尾は養母の喜世に深く愛されて育ったが、養母と父親は一九三八年に離婚した。その後、宮尾は短期間養母の下で暮らしたものの、まもなく別の愛人と、その愛人の二人の連れ子と共に暮らす父親の許に移った。一九三九年四月、宮尾は高知県女子師範学校附属小学校高等科に入学した。翌年四月、高坂高等女学校に編入学。一九四三年四月、同校家政研究科に進学。同年一二月に、同校を中途退学して代用教員（助教）として吾川郡池川町（現・仁淀川町）の安居国民学校に赴任。一九四四年二月、池川町狩山国民学校に転任するが、まもなく退職して結婚する。結婚相手は安居国民学校の同僚だった。一九四五年二月、長女出産後まもなく、前年秋より「満州」で大土佐開拓団の子女教育に従事し一時帰国していた夫と共に「満州」に渡った。敗戦後の一九四六年九月、親子三人で日本に引き揚げた後は、吾川郡弘岡上ノ村（現・高知市）の夫の実家で暮らしたが、肺結核を患い

長期の療養生活を余儀なくされた。一九五一年から五八年まで村立保育所に保母として勤務。一九六〇年代初め頃から作家活動を本格化させるが、文壇で華々しく活躍するようになるのは、離婚・再婚・上京を経て、一九七二年八月に出版された私家版『權』が脚光を浴び、太宰治賞を受賞した後のことである。

以下では本稿の考察対象である『權』、『春燈』、『岩伍覚え書』、『寒椿』の概要を説明する。^{*7}

『權』は自伝四部作（『權』、『春燈』、『朱夏』、『仁淀川』^{*8}）の第一作であり、喜和を視点人物として、喜和と岩伍の結婚生活を描く作品である。元々博奕打だった富田岩伍は結婚後一〇年ほど経った後、「南海随一の料亭」と言われた陽暉楼の主人の後ろ盾を得て芸妓娼妓紹介業者となる。喜和は夫の仕事に対する嫌悪感を払拭することができず、そのことが夫婦の溝を深めていく。喜和と岩伍の間には龍太郎と健太郎という二人の息子がいたが（龍太郎は二四歳の時に肺結核により死去、健太郎は陽暉楼のお抱え運転手を経て岩伍の仕事を手伝うようになる）、岩伍が女義太夫の巴吉との間に綾子をもうけ、綾子を夫婦の子として育てる決断をしたことで夫婦関係に危機がせまる。当初岩伍の決断に強く反発した喜和は、やがて綾子を実の娘のように可愛がるようになり、夫婦の危機は去ったかに見えた。しかし、岩伍が四人の「仕込みの子」を世話することになったことから喜和の芸妓娼妓紹介業に対する嫌悪感が募っていき、遂に夫婦は離婚する。離婚時、岩伍は喜和とは別居状態にあり、すでに愛人の照と照の二人の連れ子と共に暮らしていた。岩伍よりも喜和を慕っていた綾子は、両親の離婚に際して喜和と暮らす選択をするが、やがて周囲の説得に屈して岩伍の許に移る。他方で、喜和は、うどん屋の女将として新しい人生を歩み始める。

『春燈』は綾子の視点で書かれる文字通りの自伝的小説である。『春燈』の序盤では、『權』の後半でも扱われる綾子の幼少期が綾子の視点から語られる。やがて喜和と別れ岩伍と暮らすようになった綾子は女学校（第一高女）の入学

試験に失敗して高知県女子師範学校付属小学校高等科に入学し、さらにその二年後、高坂高等女学校三年次に編入学する。女学校卒業後には東京の女子大に進学することを希望していたが、岩伍に強く反対され、やむなく高坂高等女学校の補修科（家政研究科）に進学する。しかし家を離れるために国民学校の代用教員になることを思い立ち、女師付属時代の恩師のツテで山間部の学校に職を得る。最初に赴任した安居国民学校での任期を終えた後は狩山国民学校に転任するが、まもなく前任校の同僚の三好要からの結婚申し込みを受ける。岩伍は、要の実家が農家であることなどを理由に二人の結婚に反対するが、家を出たい一心の綾子は岩伍を説得しようとする（『春燈』の続編に当たる『朱夏』の冒頭で二人は結婚する）。

『岩伍覚え書』は宮尾の父をモデルとする岩伍が読者に語りかけるスタイルで書かれた一人称小説であり、「三日月次郎一件について」、「すば抜きについて」、「満州往来について」、「博徒あしらいについて」の四編からなる。^{*9} 宮尾は父の猛吾が一九三七年から一四年間に渡って日記と営業日誌をつけていたことを随所で語っており、『岩伍覚え書』は、この営業日誌から素材を得た作品である。^{*10} 『岩伍覚え書』には『權』や『春燈』では詳しく扱われることのなかった「遊女」の世界が、芸妓娼妓紹介業者である岩伍の視点から描かれている。

『寒椿』は宮尾が小学生の頃に一緒に生活していた四人の「仕込みの子」をモデルとして四人の人生の軌跡をたどるオムニバスのな作品であり、一章「小奴の澄子」、二章「久千代の民江」、三章「花勇の貞子」、四章「染弥の妙子」からなる。^{*11} 各章の主人公である澄子、民江、貞子、妙子は、小学生の頃に芸妓娼妓紹介業者の傍ら芸妓子方屋を営む松崎に買われ、松崎夫妻の世話を受けながら松崎の娘の悦子と姉妹のようにして育った。しかし、小学校卒業後は、山海楼を皮切りに本格的に「遊女」としての人生を歩む。もともと、その後の四人の人生は——妙子以外の三人が「満州」

の店に住み替えるなど、ある時期まで共通した軌跡をたどるもの——銀行の頭取の「二号」となった澄子、五代になった現在も芸妓を続ける民江、敗戦後すぐに「満州」からの引き揚げ船の中で知り合った大工の妻となり三人の子供をもうけながらも二八歳で亡くなった貞子、不動産会社の社長夫人となった妙子、と多様である。

『寒椿』において物語の現在とは、この作品が書かれた一九七〇年代半ば頃に設定されており、一章には、階段から落ちて半身不随になった澄子を見舞うために、民江、妙子、悦子が久しぶりに再会する場面が描かれている。四章とも三人称小説のスタイルをとるものの、物語の現在から二〇年以上前に他界した貞子を主人公とする三章を例外として、概ね一章は澄子、二章は民江、四章は妙子の内面に焦点化される。ただし、現在は作家となっている悦子の内面に焦点化される場面もあり、そうした場面において悦子は自身と「仕込みの子」との関係性を反省的に捉え直す。なお、三章は主として悦子の視点から語られるが、悦子が語る貞子の人生は、部分的に、悦子が貞子の母ハルエの従姉妹である玉枝を老人ホームに訪ねて聞き取った内容に依拠している。

三 花街の中の境界

花柳界のビジネスは、業者（以下、楼主を含めて「女衞」とする）が客に対して、芸娼妓（以下、「遊女」とする）の性的サービスを金銭を対価として提供することによって成り立っている。花柳界において男女の関係は圧倒的に非対称的である。「客」は男性、「女衞」も多数は男性、「遊女」は女性である。もちろん、性産業全体に視野を広げるならば、男性労働者が男性客に対して性的サービスを提供するビジネスも存在するし、近年は、ホストクラブなど女性

客に対して男性労働者が性的サービスを提供するビジネスも増えている。けれども、伝統的な花柳界においては、ほとんどの場合、客は男性であり、性労働者は女性であった。他方で、伝統的な花柳界においても、女性の「女衞」は少なからず存在する。たとえば、『權』に登場する大貞は大貞楼の女将であり元娼妓である。花柳界や性産業のシステムを考える上で女性の「女衞」の存在は無視できないが、本稿では扱わない。

ところで、宮尾の自伝的作品は芸妓娼妓紹介業者とその家族の物語である。見てきたように、『權』は喜和、『春燈』は綾子を視点人物とする三人称小説、『岩伍覚え書』は岩伍の視点による一人称小説、『春椿』は澄子・民江・妙子・悦子を視点人物とする三人称小説である。これらの人物の立場は、芸妓娼妓紹介業者の岩伍（『寒椿』では「お父さん」）は「女衞」、喜和（『寒椿』では「お母さん」）は「女衞」の妻、綾子と悦子は「女衞」の娘、澄子・民江・貞子・妙子は「遊女」である。さらに、これらの作品には、岩伍（「お父さん」）と喜和（「お母さん」）の息子で綾子（悦子）の年の離れた異母兄である健太郎（『寒椿』では勇太郎）も登場する。健太郎（勇太郎）は長じてから芸妓娼妓紹介業者を営む岩伍の右腕になる人物であり、「女衞」の息子にして「女衞」である。

なお、「女衞」の妻にあたる喜和や「女衞」の娘である綾子・悦子は、芸妓娼妓紹介業から得られる収入で安定した生活を享受しているものの、喜和による「内助の功」を別とすれば、芸妓娼妓紹介業に深く関与しているわけではない。本稿では、花柳界において「客」に「遊女」の性的サービスを提供する「女衞」と自らの身体や性的サービスを提供する「遊女」を「玄人」として位置づけるが、「女衞」の妻や娘は「玄人」の枠からはみ出す存在である。

喜和は「素人」と「玄人」の境界に敏感であり、「玄人」の世界を深く嫌悪しているが、そうした感じ方は喜和の潔癖さのみでなく、「玄人」の世界における女性の立場性にも起因している。前述したように、花柳界の主要なアクター

は「客」と「女衞」と「遊女」である。「客」は男性、「女衞」も多くは男性であるため、「遊女」でない女性の多くにとつて「玄人」の世界には居場所がない（女性の「女衞」も、『權』の大貞のように元「遊女」であることが少なくない）。

『春燈』には、小学生の綾子が健太郎の妻の小夜子から「兄さんがね。あんたを芸者に売ろうかというけん」と言われ、「たとえようもないほど」の驚きと恐怖を感じる場面がある（『全集』第二巻、九三頁）。この発言は小夜子の「出まかせ」にすぎなかったのだが、綾子はこの発言によって、「怠ければ、或は間違ったことをすれば、自分を待っているものは直ちに芸者への転落だと思う気持が、生涯体のなかに消え難い烙印として残された」（同、九五頁）と述べている。しかし裏を返せば、このことは、花街で生活していても、綾子が「玄人」ではないことを裏書きしている。他方で、綾子と同じく岩伍の子である健太郎は、そもそも「芸者に売られる」可能性はない。それどころか健太郎は「女衞」の手引きにより花街の「客」となり、その延長線上で「女衞」になる。

以上の点をふまえながら、四節では喜和、五節では綾子・悦子、六節では岩伍・健太郎に着目して、花街における「素人／玄人」の境界について考察したい。

四 喜和——「女衞」の妻

『權』は芸妓娼妓紹介業者である岩伍の妻である喜和の物語である。物語の終盤で喜和と岩伍の夫婦関係は破綻するが、その最大の原因は、喜和が芸妓娼妓紹介業に対して嫌悪感を抱き、その思いを折りに触れて岩伍にぶつけたた

めである。喜和は息子の健太郎を介して岩伍から離縁を言い渡されるのだが、その理由として、「喜和が岩伍の仕事を嫌がる様子を露はにするにつれ、岩伍は喜和を自分のよき協力者として見る事は出来なくなり、今では気持も遠く離れ去つてゐる」という趣旨の説明を受ける（『全集』第一巻、三五九頁）。

喜和が芸妓娼妓紹介業を嫌悪する理由については後ほど論じるが、作中では喜和が「玄人」の世界を嫌い、「玄人」の世界に馴染もうとしない様子がくり返し描かれる。喜和は岩伍が女義太夫の芸人との間に子供をもうけた際に仲裁役を買って出た大貞楼の女将の大貞から、「この世界、素人でもたまに見ん事もないけど、皆早うに水に馴れてひとりで垢抜けて捌けて来るもんや。あんただけや。年喰うてるくせに未だに子供で、気は利かんし愠気はこくし洒落も遅い」（同、一六九頁）と嫌味を言われる。

喜和は当初から芸妓娼妓紹介業の仕事を嫌っていたが、とりわけ四人の「仕込みの子」を世話するようになってから、家の中が「玄人」の世界に侵食されていくのを感じ取り、強い疎外感を抱く。長くなるが関連箇所を引用する。

子供等がこの家へ来てからと云ふもの、開業以来の富田の雰囲気はがらりと変つて了つた。と喜和はときどき、冷たい他所者の目になつて家中を見渡す事もあつた。

玄人の家ではあつても三味の音の響かぬが自慢だつたのに、今は店の書類棚の脇にかうきの棹にくわりんの胴と云ふ、ものの良い三味線が三挺も掛かり、午後になると稽古から戻つた誰ぞが懸命で弾く、たどたどしい音締めが二階から聞えて来る。三味線の脇の小物棚には稽古用の木撥、上物の象牙撥や上駒下駒、取替え用の糸の箱、赤い毛糸の指嵌め、滑り止めのゴムなど付属品一式から、舞扇、縮緬手拭、絹傘まで、鮮やかな色目が並んでゐ

る。

京町の呉服屋かめやの番頭も、緑町に倍して頻繁に訪れて来るやうになり、子供達の普段着には可愛らしい真岡木綿の花柄を、稽古に通ふ長袖には大幅物のモスリンか銘仙を大凡選んで運んで来、此の頃では真先に披露目をする筈の美代子の座敷着にと、錦紗縮緬の上物も混て来る。半幅に畳み、色糸で綴じた常着の反物にはさう騒がない子供等も、軸に巻いた柔らか物を広げるときには鈴や勝まで巻き込んで店の間に垣を作る。

(中略)

喜和は、この子等の取締りもかう云ふ衣裳選びまでが境で、それ以上は手幅^{はた}に叶はぬ、とほとほと思へる。何よりも置屋の真似事は嫌ぢやと思ふ氣持が先に立ち、隣の大西「芸妓子方屋——引用者注」の姐さんのやうに炊事場に居ても稽古三昧線に耳を澄ませてゐて、

「お前、調子の合うて無い事が判らんかね。一一上りやら三下りやら判らんものを弾いて」

と常住手離さぬ先のちびた矩尺^{かねさし}で仕込みの子の撥を持つ手をぱんと打く^う、そんな躰が喜和に出来る筈もないし、第一余程の狂ひでなければ三昧の調子など聞分けられないのであつた(同、二九九—三〇〇頁)。

右の引用からうかがえるように、「遊女」の経験を持たない喜和にとって芸妓娼妓紹介業の仕事は手に余るものだった。『岩佐寛え書』には、「私の女房喜和は根つからの素人のお出でありまして、かねがねいくら教えてもこの商売の裏表が呑み込めませず、それならそれでいっそ「お前は釜屋番」とし、店の話はこちらからしませず向うから聞きもせずにおごして来た」とする記述がある(『全集』第四卷、二二頁)。「權」によると、岩佐の仕事に対する喜和の「手助

「け」は「家の内の宰領と、一つ踏出しても妓の親達への手入れでしかなかった」（『全集』第一巻、三三六頁）。もっとも、岩伍の内縁の妻となる照についての「岩伍の云付け通り走り使ひもし、妓達を連れて県外へも行き、楼主とも会ひ、益さん長さん「男性の使用人―引用者注」並みによく働いてゐる」（同、三三六頁）という記述をふまえると、岩伍は「釜屋番」に甘んじる喜和の態度に不満を持っていた可能性が高い。岩伍は、健太郎に「家の商売を手伝はず」ことに喜和が反対した際、「何度云うたら判る。／男の仕事に女子が口を出すなどあれほど云うてある。手伝ひ一つ出来んくせに」と言つて喜和を怒鳴りつける。この時、喜和は「手伝ひと云ふのはお照の事ですか。／私にお照の真似をせよと云ふがですか」と口答えして、岩伍から頬を叩かれる（同、三三五頁）。

ところで、喜和が芸妓娼妓紹介業を嫌悪する最大の理由は、「女子の売買の上前を刎ね、それで太平無事に暮してゆくことに良心の呵責を覚えるためである。喜和は「紹介人の金」を「生き身の女子を地獄へ突落とした手でせしめる汚れた報酬」のように感じている（同、三七頁）。他方で、岩伍は芸妓娼妓紹介業に「人助け」の意義を見出す。岩伍が芸妓娼妓紹介業の拠点とした緑町には「高知市一といふ札付きの貧乏長屋」（同、五三頁）があり、岩伍には「裏町の惨めな暮しの人達を少しでも救上げたい」（同、三七頁）という強い思いがあった。岩伍は喜和に対して次のように述べる。

「お前は知るまいが、裏町の長屋には今日の口過ぎくちがしにも困る人間がどつきり居る。親の困窮を見て、娘が我が身を売つてでも助けるのはこれは当然の事。さういふとき、紹介人の働きが無うては貧乏人は浮び上れまい。云うてみりやこれは人助けの仕事かも知れん。」（同、三八頁）

右のような発言は偽善的にも感じられるが、岩伍は、しばしば損得勘定を二の次にして「遊女」の面倒を見る。『岩伍覚え書』において、岩伍は「本人の前借に余程余裕のある場合を別にして、よんどころのない身売りの妓供からは、手数料は一銭たりとももらってはおりません」（『全集』第四卷、一七一—一八頁）と断言している。『寒椿』一章には、「仕込みの子」の一人である澄子が山海楼から巽楼に住み替える時、「お父さん」が最初に澄子を引き受けた時の「身代金三百円の貸金証文」を「ちりぢりに引き裂いて傍らの火鉢にくべ」、「さ、これでお前は僕に一文の借金もない身になった。あとあと気兼ねは要らん」と言い渡す場面がある（同、二〇四頁）。澄子は巽楼に住み替えてから「お父さん」の良心的態度の有り難みを身にしみて感じる。

『權』には、喜和が「仕込みの子」に対する岩伍の情け深い態度をふまえて、「男の三十四十を「情ざかり」と云ひ、女房以外の女にまで情を掛け易くなる状態をさう云ふけれど、岩伍の場合は三十四十どころではなく、一生殆ど情ざかりなのではあるまいか」と考える場面もある（『全集』第一卷、二九六—二九七頁）。

だからといって喜和は芸妓娼妓紹介業を「人助け」とみなす岩伍の考え方に共感するわけではない。そもそも「素人の出」の喜和には、娘が身売りして貧しい家族を養うことを「当然の事」だとは思えなかった。喜和の実家は慎ましい古物商であり、「商売枯れの時期など、朝飯は麦の粥に醤油の実だけがずっと続」くことさえあったが、「自分が身売して家を救はうなどと考へた事もなかつたし、（略）梅「喜和の母——引用者注」もさういふ親孝行の望みを喜和に抱いた事は恐らくなかつた」（同、三八頁）。そのため、岩伍が裏長屋に住むお卷さんの娘の豊美を陽暉楼に世話した時、喜和は、お卷さんが「顔見世」のために「悪びれもせず」豊美を店に連れて来て、「遊山か何ぞの打合せのやうに楽しげ」に話す様子を見て、「このひとは我が子売つて嬉しいのであらうか、と呆れ」、お卷さんを「ひとりで詰

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

るやうな目付き」で凝視する（同、四九―五〇頁）。

もつとも、親が娘を身売りする最大の原因は家庭の経済的困窮である。スペイン風邪が流行した時、岩伍は喜和に裏長屋に住むお卷さんの元に米一升を届けるよう言いつけるのだが、裏長屋を訪れた喜和は想像を絶するほどの困難な暮らしぶりを目の当たりにして怖気をふるい、逃げ帰ってしまう。この経験から、喜和は「似非貧乏人のやはな暮らし振などとても傍へも寄れぬこと」（同、六〇頁）を思い知る。『寒椿』では、悦子の視点から、「仕込みの子」の貞子の実家がある裏長屋の貧困のすさまじさが、「じゅくじゅくと腐りかけたとぶ板を跨いで入ってゆくこの貧民長屋は、鼻がひん曲るほどの悪臭と汚穢おわいに充ち、悦子は初めてこの壁の落ちた一間きりの暮しと云うものを見たし、檻ぼろを被って寝ている病人や、戸口の脇に溢れた小便桶と竈かまどが並んでいるのも見て強い衝撃を受けたものであった」（『全集』第四卷、三三四頁）と描写される。

ちなみに、『權』では岩伍が金銭に執着を持たない人物であることが強調されており、『岩伍覚え書』では、語り手の岩伍が「これまで稼いだ金はほとんど右左裏町の人達のために使ってまいりまして、己の貯えと云うさもしい金の持ち合わせが御座いません」（同、三四頁）と述べる場面がある。他方で、綾子の視点で書かれる『春燈』や『朱夏』から判断する限り、富田家は控えめに言っても中流以上の裕福な生活を享受している。しかも、『満州』で極貧の生活を経験するまで綾子はそうした生活を自明のものと考えていた。^{*12}生まれた時から「お嬢さん」として育った綾子ほどではないにせよ、離婚するまで喜和も人並み以上の生活を享受していたことを考えるならば、喜和が「女術」の妻であることに對して強い罪悪感を表明することは気休めとも感じられる。

他方で、「玄人」の世界に對する喜和の嫌悪には金銭と性にまみれた世界に對する忌避感も混じっている。次男の健

太郎が中学校三年生になってから「素行の乱れ」が目立つようになり、喜和は健太郎の担任から呼び出しを受けるのだが、その際、担任が「お宅のお仕事柄」という言葉を口にしたことに強く反発する。

やがて喜和は、頻繁に外泊するようになった健太郎が、「親ほども年上の酌婦上りの年増」のハルと交際していることを知る。そこで喜和は、健太郎の「素行の乱れ」が、岩伍と取引関係のある楼主たちから「富田の若さん」と声をかけられ、「おひとつかが？」の勧めを鷹揚に受付けたところから始まったのではないかという疑いを持つようになる（同、一八九頁）。結局、健太郎は四年生に進級する前に退学処分となり、大阪の下駄屋の職人の丁稚奉公に出るものの長続きしない。しかし、その後、陽暉楼のお抱え運転手の職を得て真面目に仕事に励むようになり、周囲から上々の評判を得るまでになる。喜和は、そのことに安堵しつつも、「子供だけは堅気な仕事を持たせたかった」と思わずにはいられない（同、二三六頁）。

つまり、喜和は「玄人」の世界を墮落した世界として捉えるからこそ、自身や子供たちを「素人」の世界に囲い込むことに躍起になる。次節で見るように、こうした態度は喜和の娘の綾子にも共通している。

五 綾子・悦子——「女衞」の娘

本節では、『春燈』と『寒椿』を中心として、綾子・悦子が「素人／玄人」の境界をどのように捉えているのかを考察する。先述のとおり、『春燈』は、宮尾をモデルとする綾子が芸妓娼妓紹介業を営む家庭で子供時代を過ごし、女学校卒業後に国民学校の代用教員となるまでを描く作品である。『寒椿』は、宮尾をモデルとする悦子が小学校時代に一

つ屋根の下で暮らした四人の「仕込みの子」の人生をオムニバス形式で描く物語である。

『春燈』によれば、綾子が小学校二年生になる頃、綾子の家族は緑町から岩佐の取引先の陽暉楼に近い「海岸通り」に転居した。^{*13} 転居後まもなく「一つから三つまで年上の」四人の「仕込みの子」が家にやって来て綾子と同居するようになった。それ以来、綾子は「仕込みの子」たちと一緒に学校に通うようになった。

綾子は、まもなくこの家にやって来た一つから三つまで年上の四人の仕込みっ子たちと一緒に毎日学校へ通うようになったが、道は料亭陽暉楼のわきの坂を下って遊廓、稲荷新地を突っ切り、電車道に沿ってゆくのが近道とあって、軒を並べた妓楼の裏を抜けてゆくことになる。夏など、開け放った小部屋で赤い蒲団に客と一緒に寝ている女性たちの、ほとんど枕許に近い細道を通りながら綾子はそっち側へ決して視線を向けなかった。

遊廓がどんなところなのか知るよしもないけれど、緑町の頃の、家に屯ろしていた寄食人や男衆たちがあるとき突然、みだらな表情を浮べる折があるのを本能として嗅ぎ知っており、遊廓の金網のなかの、まるで動物園のような檻のなかに入っている女性は、男のその欲望的な目のいろと関わりがあるらしいとだけは判る。綾子だけでなく将来その女性と似た運命を辿る家の仕込みっ子たちもそんな話は誰もしなかったし、綾子同様、小部屋のなかをのぞき込みもしなかった（『全集』第二巻、三九―四〇頁）。

右の引用から、綾子が物理的には遊廓の内に足を踏み入れながら、遊廓の内と外を区別する境界を強く意識し、遊廓の外に身を置こうとしていることが読み取れる。なお『寒椿』には、悦子の家（松崎）の周辺の様子が、「播磨屋橋

から南、鏡川にかけての界限には山海楼、巴楼、蓼乃家、末広亭などの大きな料理屋と高知検番があつて、そのあいだを埋めるように大正の子方屋が軒を並べている」と書かれており（『全集』第四卷、一九八頁）、悦子の家（松崎）が花街のただ中に位置していることが示唆される。他方で、松崎については、「家の造りからして素人家だった」（同、一九八頁）、「よその子方屋から松崎の素人商売、と笑われるほど五人が仲睦まじかった」（同、二〇〇頁）と記されている。もともと、四人の「仕込みの子」は芸妓になるための稽古を始めており、すでに「玄人」の世界に足を踏み入れていた。

悦子と仕込みの子たちの違いと云えば、仕込みっ子たちは一に稽古、悦子は勉強と定められている事で、澄子たちは近くの第一小学校から年中早退扱いでもって昼まで戻ると、お母さんに長袖の着物を出して貰って毎日舞と三味線の稽古に通う。四人の子が二階でいっせいに三味線のお凧いなど始めると、一人ぼっちの嫌いな悦子が寄つて来て触つたり声を出したりして邪魔をするとき、四人は四人とも威張つて、

「いらつ、悦子」

と頭からけんたいで怒鳴り、それでも止めないときは澄子が代表で、

「お母さあん」

と大声を挙げ、

「悦ちゃんがうちの稽古の邪魔するもの。怒つて頂戴」

と云い上げに駈け出してゆく。（同、一九九—二〇〇頁）

このように「素人／玄人」の境界は松崎（自伝四部作では富田）の家の内部にも存在しているが、「お父さん」（岩伍）は悦子（綾子）と「仕込みの子」を努めて平等に扱おうとした。「お父さん」は悦子と「仕込みの子」に同額の小遣いを与え、同じ食事の菜を与え、子供同士で寝るように言いつけた。しかしながら、「素人／玄人」の境界にこだわ「お母さん」（喜和）は岩伍の方針に従わず、悦子（綾子）を特別扱いした。『春燈』には次のような記述がある。

以前、仕込みっ子四人が家にいた頃、岩伍はつねに、綾子も四人と平等、といい、小遣いの高も一緒なら自分の部屋の掃除も同じように、寝るのも子供同士、と命じたが、何しろほとんど家にはいない岩伍の言葉は、喜和の「そんなことをしたら、綾子がむごい」の思いのために、大てい守られなかった。日曜の朝、四人とともに綾子も雑巾がけをしようとすると、喜和はいつも目くばせをしてとどめ、夜、皆の寢床へもぐり込んでいると、必ず起しにやってくる（『全集』第二巻、一二三頁）。

『寒椿』では、悦子を「特別扱い」する「お母さん」の態度が「仕込みの子」の視点から批判的に捉え返される。二章では、山海楼から「満州」の大斗楼に住み替えするまで松崎に滞在した民江が、「お母さん」が女学校入学試験を控えた悦子にかかりきりになっている様子を目にして苛立ちを覚え、かつての差別待遇を思い起こす場面もある。

それでは、悦子（綾子）は自身と「仕込みの子」の関係をどのように捉えていたのだろうか。『權』では喜和の視点から、「仕込みの子」たちが家に来た時、「家中で一番喜んで迎へた」のが綾子であったこと、五人が集まると「仔犬がじゃれ合うよう」に仲良く遊んでいること、綾子が喜和よりも「仕込みの子」と眠るのを好んでいることなどが語

られる。

他方で『春燈』では、綾子の視点から、「姉妹は仲良く、一つのものは平等に分けて、苦しいことは助け合うて、お互いの悪口をいわんように」という岩伍の言葉について、「少しも身に沁みなかった」と回想される。さらに、「自分はこの家の主人の娘で、将来芸者になる仕込みつ子とは姉妹なんかじゃない、といつも思った」ことが暴露される（『全集』第二巻、一七二頁）。

とはいえ、当時の綾子は芸者が何であるのかを理解していたわけではなかったし、「仕込みの子」たちが「みじめだとか、むごいとかの感想を持ったことはないし、その身の上を嫌悪したという覚えもな」かった（同、九三頁）。にもかかわらず、綾子は「こういう家に育った子の極めて本能的な警戒心」から「芸者になること」を「身震いするほど恐ろしい」と感じていた（同、九三―九四頁）。逆に言えば、綾子は、芸妓や娼妓の仕事について知る以前から「素人／玄人」の境界を内面化していたということになる。しかも綾子は、一つ屋根の下で生活する「仕込みの子」が、いずれ「玄人」の世界で生きること十分に理解していた。

他方で、綾子（悦子）は、成長するにつれて芸妓娼妓紹介業の家の娘として生まれたことを恥じるようになる。最初のきっかけは小学校二年生の時の家庭訪問だった。綾子は、担任の先生が店の看板を目にとめ、「バンカンが見えるよる、バンカンが見える」と繰り返すの聞き、「先生の言葉の奥底にひそんでいるものを敏感に感じ取り、ああやっぱりそうだったのか」と合点する（同、四一―四二頁）。次のきっかけは、第一高女の入試に失敗した時、入試にパスした友人の山原好子から、綾子が不合格になったのは家の商売が原因だと聞かされたことである。さらに女師付属時代になると、綾子は「今日お前の受持の中西先生がおいでつかされた。先生もお前には困り入っておられるそうな」

（同、一八七頁）という岩伍の言葉から、中西先生が「お宅のご職業がご職業ですから」（同、一八八頁）という言葉を送発しつつ自分の反抗的な態度を岩伍に報告したのではないかと推測する。このことは、健太郎の中学校の担任が健太郎の「素行の乱れ」について喜世に報告する際、「お宅のお仕事柄」という言葉を発したことを思い起こさせる。つまり、綾子や喜和がどれほど自身を「素人」の側に位置づけようとも、他人の目から見れば、「女街」の家族である綾子と喜和は「玄人」の世界の住人にほかならないのである。

『寒椿』によれば、こうした経験が重なるにつれて、悦子には「四人の仕込みっ子と一緒に住み、一緒に育った自分の境遇をまわりに隠したい思い」が募っていった（『全集』第四卷、二七一頁）。『寒椿』第三章では、「満州」から戻るばる結婚祝いに帯と帯メを届けてくれ貞子に対してすげない態度をとったことが後悔の念と共に回想される。五〇代の悦子はその理由の一つを、「嫁ぐ相手の家が堅い職業である故に、芸妓などから祝い品を貰いたくない気持」にあっただとしている（同、三二九頁）。

そもそも、悦子が結婚を急いだ理由は「松崎の家業から逃れたさ一心」（同、三三〇頁）だった。『春燈』では、元同僚の三好先生からプロポーズを受けた際の綾子の思いが、「三好先生ならちょうどよい、職業は教師だし、家は農業、これほど堅い場所にかくまってももらえばこれから生涯、誰が自分を忌むしい家業の娘と思うだろう」（『全集』第二卷、三六七頁）と書かれている。つまり、綾子（悦子）は結婚という手段を通じて、自らを芸妓娼妓紹介業を営む父親と家、即ち「玄人」の世界から切り離そうとしたのである。

他方で、宮尾の自伝的作品には、少女時代の自分と「仕込みの子」の関係を反省的に捉え直す姿勢も見られる。『寒椿』では、五〇代になった悦子の観点から「仕込みの子」に対する自責の念がストレートに表明される。悦子は四人

の「仕込みの子」と暮らした「小学校一年から五年までの歲月」を「ひとつひとつ手繰ってゆけば懐かしいというよりは痛さに似た感情が先に立つて来る」と述べ、「ただでさえ幸せの薄い彼女たちに、何の弁えもなかった子供の悦子が辛く当りはしなかったかという疑い」を表明し、「彼女たちに恨まれれば恨まれるだけの根拠は充分ある」（『全集』第四卷、二四二頁）と吐露する。

もつとも、だからといって、悦子が「素人／玄人」の境界そのものを相対化しているとは言えない。『寒椿』第一章には、澄子が階段から落ちて大怪我をしたという報せを聞いた悦子が東京から見舞いにかけている場面がある。タクシーで病院に向かう途中、「もし澄子たち四人が普通の家に生れていて芸妓商売などする事がなかったら、今頃は果してどんな暮しをしていたらうか」（同、二五〇頁）という思いが何度も悦子の頭をよぎる。他方で、悦子は、「自分が彼女たちの立場でなく、まだしも松崎の子でよかった」、「これまでの浮き沈みのあいだには手段を選ばず金の欲しい時期もあったけれど、どう堕ちても男相手の商売だけは固くすまい、と思い、またそれを通せるだけの運のよさがあつたのは、昔から世の中における彼女たちのみじめな位置が頭に沁み込んでいた為でもあつたらう」と考えずにはいられない（同、二五〇頁）。

つまり、悦子において「遊女」にならざるを得なかった「仕込みの子」に対する同情と、自らが「遊女」にならずにすんだことについての安堵の気持ちは表裏一体である。そして、その根底には、女性の運命は「遊女」になるかどうかによって二分されるという強い思い込みが抜きがたく存在する。「素人／玄人」の二分法は悦子の心の中に揺るぎないものとして存在している。

六 岩伍・健太郎——「女衞」とその息子

本節では、まず「女衞」である岩伍による「素人／玄人」の境界をめぐる認識について、喜和や綾子（悦子）との比較を交えつつ検討する。その後、健太郎が「女衞」になるプロセスについて、同じく「女衞」の子である綾子との差異をふまえつつ考察する。

四節で論じたとおり、岩伍は芸妓娼妓紹介業に「人助け」の意義を見出していた。『岩伍覚え書』では、芸妓娼妓紹介業の存在意義が娼妓運動の批判を交えつつ雄弁に語られている。

私として芸妓娼妓が決していい職業だとは思っておりませんが、高知市の貧民窟と具つぶさに関わりあつた経験のある人間なら、この実状のなかで娼妓運動を唱えるのは、貧乏人は皆首を縊って死ね、と云うに等しい事がお判りで御座いましょう。

（中略）

私、くどいは御座いますが、人様から卑しめられるとは知りながら云う職につきましたのも、いささか考えるところが御座います故で、それは家のため親のため止むなく身を落す女達に少しでもいい条件が当りますよう、かつは阿漕な雇い主の監視と云う考えも加わっておりまして、及ばずながら今日まで非力の腕を振ふるってまいりました（『全集』第四巻、三二頁）。

売春が貧困女性にとっての命綱であり必要悪だというのは今日でも耳にする、ありふれた主張であるが、売春業者による自己正当化の論理として用いられることも少なくない。^{*14}もちろん前述のとおり、岩伍が良心的な「女衞」であることは事実である。とはいえ、たとえ極度に搾取的でないにしても、岩伍にとって芸妓娼妓紹介業は営利目的のビジネスであるし、『寒椿』や『岩伍覚え書』等に描かれる芸妓娼妓の状況は極めて過酷である。これらの点から判断して、芸妓娼妓紹介業が「人助け」だとする岩伍の主張は〈女衞〉による自己正当化であると言わざるを得ない。

他方で、岩伍において「素人」と「玄人」を差別化する姿勢は強くなかったように思われる。先述したように、岩伍（「お父さん」）は綾子（悦子）と四人の「仕込みの子」を可能な限り平等に扱おうとしたし、喜和の反対で実現しなかったものの、「仕込みの子」を養女にしようとさえした。

このような岩伍と喜和の間に見られる「素人／玄人」の境界をめぐる認識の相違について考える際、「玄人」のステイグマが性別によって異なる意味を持つことも考慮する必要がある。花柳界における「玄人」とは、通常は「遊女」のことを指す。それゆえに、「玄人」のレッテルは、「男性」よりも「女性」の場合に、はるかにネガティブな含意を持つステイグマとして機能する。

そもそも、綾子が「芸者に売られる」ことに強い不安を感じていたように、また五〇代の悦子が「遊女」にならずにすんだことを安堵したように、さらに『岩伍覚え書』の「満州往来について」において、腕利きの弁護士のお嬢である三姉妹が、父親が病に陥った後に「遊女」として身売りされたように、可能性のレベルでは、どんな女性も「遊女」になり得る（もちろん、実際には、女性が「遊女」になる可能性は出自や経済階層等によって大きく異なる）。

また、「玄人」のレッテルは、性的に奔放であるというイメージにも結びついているが、このイメージは、女性の場

合にのみステイグマとして機能する。『春燈』では、女学校時代の綾子が異性に対して徹底して禁欲的であろうとしたことが語られ、その理由が、「家業を蔑むならば、己れを蔑むに足る資格を持つていなければならず、その資格とは、男によるいささかの瑕瑾もあつてはならない自分なのであった」（『全集』第二卷、二五八頁）と説明される。前節で詳しく見たとおり、綾子は「芸妓娼妓紹介業の娘」としてのレッテルを強く嫌悪していた。

言うまでもなく、こうした綾子の心持ちは、健太郎のそれとは大きく異なっている。作中では、健太郎が家業の芸妓娼妓紹介業をどう捉えていたのか書かれていないものの、強い忌避感を持っていたとは考えにくい。もし健太郎が家業に対して強い恥の意識を持ち、父親とは異なる人生を歩もうと固く決意していたならば、中学校において「素行の乱れ」を理由に退学処分を受ける羽目に陥ることはなかったであろう。しかも、健太郎は自分の意思で——健太郎と出会った時点で半玉であったものの——「芸妓」だった女性を妻に選んでいる。

ところで、喜和は中学校時代の健太郎が「親ほども年上の酌婦上りの年増女」と交際していることを知り、大きなショックを受けるが、岩伍は、「健太郎の事は放つて置け。／男が何処に居つて何をしようが構ふ事はない。学業だけちゃんと続けて居つたらそれでええ」（『全集』第一卷、一八八頁）と言って、健太郎の女性関係に頓着しない。このような岩伍の態度を喜和は次のように考える。

女親が男の子を一点異性として見る目があるやうに、男親は男の子に朋輩としての寛大さを、それも悪事を分け持つ朋輩の目で恕してでもあるものであらうか。家がかう云ふ商売なら、健太郎が物欲しげに新地を彷徨（うろた）いてゐたとしても、さあ、さあ、と手招きして呼び上げ、心得て遊ばせるのが顔見知りの楼主たちの常識であり、そ

のつけを親に廻すどころか、万一聞かれても知らぬ顔で押通す粋の利かせやうなら、岩伍は岩伍で、それと察した楼主の許へ、よい妓を選んで送り込むのであった（同、一八八—一八九頁）。

芸妓娼妓紹介業者と楼主は相互に取引関係を持つ「女衞」であるが、芸妓や娼妓と「遊ばせる」ことが業者間の接待となり得ることは想像に難くない。もともと、右の引用において、楼主から接待を受けるのは岩伍ではなく、息子の健太郎である。健太郎は父親の取引相手の「女衞」によって「客」として女性を取引（交換）する男同士の関係の中に組み込まれ、やがて「女衞」になる。

『岩伍覚え書』には「満州往来について」と題した一篇があるが、岩伍はこの作品の中で、日中戦争勃発後に「満州」との取引が始まり一九四〇年にピークを迎えたこと、その間に富田家は「満州」全域の妓楼に多数の芸娼妓を送り込んだこと、長旅が困難になった岩伍に代わって若い健太郎が頻繁に「満州」を訪問したことが回想される。

ただこの男、私の躰が至りませんためか、渡満すれば必ず仕事を忘れ、楼主たちに勧められるまま、浦島のようにいくらでも遊び呆けるので御座います。私の営業日誌に依れば最高六十三日間も滞在し、気のいい男です故、その間帳場を手伝ったり楼主に奢られたり奢ったりでついつい腰が重くなるものと見え、私の矢継早の催促電報も犬に論語ほどの効き目もなかったようであります。その気になれば一城を潰すほどの豪華な遊びも叶うと云う誘惑的な満州で、三十を出たばかりの若い者に用件だけで蜻蛉返りせよ、とまでの辛い事は申しませんが、妓楼に根を生やしたような仕事振りは私の信用にも関わろうと云うもので御座います（『全集』第四卷、一一一頁）。

右の引用中の「遊び」とは飲食のみでなく、「遊女」の性的サービスを享受することも含まれると考えられる。つまり、「女衛」同士が「奢ったり奢られたり」する関係は、「女衛」が男性であることを前提として成り立っている。

ところで右の引用は、「遊び」好きの健太郎に苦言を呈する形をとっているものの、同時に、岩伍にとって健太郎が頼もしいビジネス上のパートナーだったこともうかがわせる。岩伍が当初から健太郎に家業を継がせようと考えていたのかははっきりしないが、若くして楼主たちから「富田の若さん」として遇された健太郎が、岩伍の後ろ盾であった主人が経営する陽暉楼の運転手となり、やがて岩伍の仕事を手伝うようになるのは自然な流れと感じられる。

他方で、岩伍は娘の綾子を大学出の男性と結婚させて専業主婦にしたいと考えていた。岩伍は「女が外で働くなどもつての他^{ほか}。女は家を守り、ええ子を育て、主^{あるじ}に仕えるのが道じゃ」と「事ある毎に口にし」（『全集』第二巻、二二六頁）て、綾子の大学進学に強く反対した。結婚相手の職業については、「月給取りや農業は富田家にはふさわしくない」（同、三三八頁）としか述べていないが、おそらく岩伍は綾子を「玄人」つまり「女衛」の家庭に嫁がせるつもりはなかったであろう。

『春燈』には、綾子が、新京で妓楼を営む岩伍の友人の養女になりたいと主張した時に、岩伍が激しく動揺して拒絶の意思を示す場面がある。^{*16} 綾子は、この時、岩伍が「拒否した」理由について、「娘を妓楼の主^{あるじ}にしたくはないという潔癖感がまず働いたのではなかったろうか」、「職業に貴賤の別はない」／と胸を張るくせに、娘だけは別の世界に嫁がせたいという強い希望もあったか（同、二九三頁）と推し量っている。右の場面における岩伍の真意を特定することはできないものの、岩伍は綾子が「素人」の世界に止まることを望んでいた可能性が高い。芸妓娼妓紹介業に誇りを持っていた岩伍にして、娘の進路に関する限り「素人／玄人」の境界意識と無縁ではなかったと言えるのではな

いだろうか。

七 おわりに

宮尾登美子の自伝的作品は、花街に生きる人々を分断するジェンダーや階級に基づく境界を鮮やかに浮かび上がらせているが、作品の内部でそれらの境界が相対化されているとは言えない。『寒椿』では、悦子が「仕込みの子」との関係を反省的に捉え直そうとするものの、「遊女」と「遊女」でない女性を二項対立的に捉える観点は自明のものとなっている。

宮尾の自伝的作品に、「素人／玄人」の境界を少しでも動揺させる契機があるとするならば、それは岩伍と離婚した喜和がうどん屋の女将になる物語の展開に関わっている。岩伍との離婚にしぶしぶ同意した喜和は、うどん屋の女将となった後、仕事に打ち込んで活力を取り戻す。作中では、喜和の心情が次のように語られている。

考へてみれば、長い間、岩伍から渡されるたつぶりの金を好きなやうに使ひ、富田の本妻としての面目を保つて来た身が、日々五錢拾錢の金の出し入れをし乍ら商ひする事の変りやうに自分ながら驚かぬでもなかつたけれど、いまはこれが生きてゆく手立てだと思えば商ひへの腰も据わり、面白味も湧いて来る。それに、喜和は、もう目の前で女の鉢の売買ひを見なくなつたのも一つの安堵でもあつた。(中略)。これですっかり素人の世界に戻つたと云へば思上りになるけれど、玄人社会の小粋さとは前を張る一方である事を考へれば、野暮と云はれても

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

かう云ふ裏のない商売の方が喜和にはずつと息がし易く思はれる。昔に較べて今が幸せとまでの気分にはまだ到底立到らないけれど、「日が葉、年が葉」と云ふ大貞の言葉は今も胸に生き少くともこれなら堪へられさうであった（『全集』第一巻、三八四頁）。

もちろん、右の引用に見られるように、喜和は離婚後も「素人／玄人」の境界に囚われ続けている。ただし、職業を持ち経済的に自立した喜和は、芸妓娼妓紹介業によって得た利益で贅沢な生活をしながら「女子の売買の上前を刎ね」ることに罪悪感を抱くような堂々巡りの状態からは解放されている。さらに喜和は額に汗して働く労働者となっている点で、かつての「女衞」の妻よりは「遊女」に近い立場にある。想像をたくましくするならば、今後、喜和と「仕込みの子」が、うどん屋の女将と客として出会い直すことがないとは言えない。

自伝四部作の四作目である『仁淀川』において、岩伍は空襲によって財産を失い、慎ましい暮らしをしている。戦争中、「外地」で働く「遊女」の手配に奔走した岩伍は、敗戦によって国家に裏切られたという思いを抱き、芸妓娼妓紹介業からはキツパリと手を引いている。他方の喜和はうどん屋を再開し、客足も戻って忙しく立ち働いている。戦前から喜和の店が繁盛していることを知る岩伍は、内縁の妻の照と共にうどん屋を開く。照からうどん屋を開業する計画を聞いた綾子は、咄嗟に「岩伍は喜和の真似をしている」と考える。このような物語の展開から、職業を持つ女性として独り立ちした喜和の生き方を肯定するメッセージを読み取ることは困難ではなからう。

注

*1 本稿では、娼妓、芸妓、酌婦などの性的サービスを伴う接客業に従事する女性を「遊女」と総称する。なお、芸妓、芸者、娼妓などの言葉には差別的な含意が含まれることがあるが、本稿では歴史的用語としてそのまま用いている。読みやすさを考慮して括弧は用いない。

*2 拙稿「芝木好子『洲崎パラダイス』を読む——「廓」をめぐる境界の物語として」『昭和文学研究』第六二号、二〇二二年三月。

*3 『洲崎パラダイス』においても、「洲崎の女」には、作者の分身である「私」が経営者の友人を訪ねるために特飲街の店を訪問する場面がある。なお、女性作家の作品に、「遊女」を語り手・視点人物とする作品や客の視点から「遊女」を描く作品が存在しないわけではない。たとえば、林芙美子「牛肉」では、客の視点から「遊女」の転落の過程が捉えられている。拙稿「林芙美子「牛肉」論——「遊女」の転落物語」『北海道大学文学研究紀要』第一七五号、二〇二五年三月。

*4 小林裕子は「女の目で見た虚飾の裏側——宮尾登美子が描く芸妓」岡野幸江・長谷川啓・渡邊澄子編『買春と日本文学』、東京堂出版、二〇〇二年において、花柳界を描く宮尾の小説（『陽暉楼』を含む）を「性を買う側からでなく、売る側——特に娼妓の視点から描く」いている点において高く評価している。本稿は小林の評価を否定するものではないが、宮尾の自伝的小説においてユニークかつプロブレマティックな点は、「売る側」にも「買う側」にも立ち得ない芸妓娼妓紹介業の妻と娘の視点を組み込んだ点にもあると考える。

*5 花街については、加藤政洋『花街 遊興空間の近代』講談社学芸文庫、二〇二四参照。

*6 以下の記述は、「浮き沈み五十年」『読売新聞』夕刊、一九八〇年六月二七日～七月一九日『宮尾登美子全集』第十四巻、朝日新聞社、一九九三年所収、『宮尾登美子 年譜』『宮尾登美子 八十八年の生涯』改訂版、高知県立文学館、二〇一七年による。宮尾の人生については、大島信三『宮尾登美子 遅咲きの人生』芙蓉書房出版、二〇一六年も参照。

*7 本稿における宮尾登美子の作品からの引用は、『宮尾登美子全集』全十五巻、朝日新聞社、一九九二—一九九四年による。以下、『宮尾登美子全集』は『全集』と略記する。『』は改行箇所を示す。

*8 『権』第一部は一九七二年八月に私家版として刊行された（『展望』一九七三年七月号に掲載）。その後、一九七三年十二月に上巻（第一部・第二部）、一九七四年三月に下巻（第三部・第四部）として書籍化された。『春燈』は『新潮』一九八五年八月号から一九八七

宮尾登美子自伝的作品における花街の中の境界

年一月号まで連載後、一九八八年一月に新潮社より書籍化された。『朱夏』は、一章および二章は『すばる』一九八〇年五月号から一九八一年二月号まで、三章以下は一九八三年新年特大号から一九八五年四月号まで連載後、一九八五年六月に集英社から上下巻として書籍化された。『仁淀川』は『新潮』一九八八年一月特大号から二〇〇〇年二月号まで連載後、二〇〇〇年二月に新潮社より書籍化された。

*9 それぞれ『岩佐覚え書』のサブタイトルを付して『文芸展望』第一〇号（一九七五年七月）、同第二二号（一九七六年一月）、同第一四号（一九七六年七月）、同第一五号（一九七六年一〇月）に掲載後、一九七七年一月に筑摩書房より書籍化された。

*10 『岩佐番外・鈴八のこと』（『ちくま』一九七七年四月）によれば、『岩佐覚え書』は、岩佐が丹念につけた十四冊の日記と営業日誌から話を拾い小説に構成したものである（『全集』第十四巻、二四一頁）。自伝四部作にも営業日誌への言及がある。

*11 『春椿』は『海』一九七六年新年特大号から二月特別号まで連載後、一九七七年四月に中央公論社から書籍化された。

*12 たとえば、女学校卒業後に代用教員として山間部の国民学校に赴任した綾子は、自分の着ている高価な服が周囲からどう見られているかを全く意識していなかった。また、綾子の給与は月額二四円であるにもかかわらず、一往復で十円近い交通費をもつとせず毎週実家に帰り、その度に照を通じて小遣いを「十円、二十円、と」受け取っていた。安居国民学校に転任後は、一ヶ月十七円の家賃の新築の家を「検分もせずに」借りることを決めた。さらに綾子は、岩佐と取引関係のあった涼月定の女将に対して頻繁に牛肉と卵を届けてもらうように頼んだため、女将から「あのねえ。先生は立派なお父さんが控えておいでで、お金に不自由のないことは判る走ですぞね。こころ辺りのひとは年に一回もたべやせん。近所のひとの手前もある」とたしなめられた（『全集』第二巻、三三六頁）。

*13 この点は、ほぼ伝記的事実に基づいている。一九三四年三月末に海岸通り二丁目に引越しを行った宮尾の自宅の四軒隣には陽暉楼のモデルとなった得月楼本店が存在した。前掲大島『宮尾登美子 遅咲きの人生』。当時の宮尾の自宅周辺は稲荷新地（下知新地）と呼ばれる花街・遊廓街であり、玉水新地を指す「上の新地」に対して「下の新地」と呼ばれていた。「特集〇遊廓・玉水町今昔」『月刊土佐』一二号、一九八四年など。上村行彰編『日本遊里史』春曜堂、一九二九年）の巻末に収録されている「日本全国遊廓一覧」の高知県の欄には玉水新地について貸座敷数二八、娼妓数二七九、下知新地について貸座敷数一四、娼妓数一二八との記述がある。高知県立図書館デジタルギャラリーに掲載されている「大高知市街地図」（一九三五年）には、得月楼と宮尾が通った高知市立昭和尋

常小学校の場所が記されている。⁶ <https://kocnibiri-project.org/detail/kochi-20170926-0027-0001?p=2> (二〇二五年四月一日最終閲覧)。

* 14 映画『赤線地帯』(溝口健二監督、大映東京、一九五六年)には、売春防止法案が国会に上程される状況の下で、吉原の「夢の里」の主人が従業員たちに対して、「本当にお前たちのことを心配しているのは俺たち業者だ。こうやって店を作って商売させてるからお前たち食うには困らないし、一家心中だつてせずにすむんだ」と演説する場面がある。

* 15 『權』には、健太郎が中学校を退学処分になった時、岩佐が健太郎に対して「阿呆な奴よ。その気になれや、大学まで行けたのに」と「怒気を露はに」する場面がある。『全集』第一巻、一九〇頁。

* 16 この友人は「芸者上りの女房」との間に子がなかったため、綾子に婿をとつて後継ぎにする前提で、かねてから岩佐に対して綾子を養女に欲しいと熱心に乞うていた。

執筆者紹介

小林 理 正（日本古典文化論）

新 開 なつみ（文学院修士課程修了）

水 溜 真由美（映像・現代文化論）

令和7年7月28日 発行

編集者

北海道大学文学研究院長

川 端 康 弘

発行者

北海道大学

(株) アイワード

**Bulletin of the Faculty of
Humanities and Human Sciences,
Hokkaido University**

CONTENTS

Reprint of "Torikaebaya" (vol. 1) held at Osaka University

International Studies Library, part. 1

..... Tadamasu KOBAYASHI, Natsumi SHINKAI (Right) 1

The Boundary within the Red-light District in

Tomiko Miyao's Autobiographical Works:

Kai, Shunto, Iwago Oboe-gaki, and Kantsubaki

..... Mayumi MIZUTAMARI (Right) 63